

砺波の 真宗 風土

砺波郷土資料館、とみな散居村ミュージウム、砺波市美術館共同企画展



砺波の真宗風土

砺波郷土資料館、となみ散居村ミュージアム、砺波市美術館共同企画展

平成二十二年十一月十三日―十二月十九日
砺波の真宗風土
砺波市美術館

主催 砺波の真宗風土展実行委員会
北日本新聞社
共催 富山テレビ放送
後援 となみ衛星通信テレビ
エフエムとなみ
となみ芸術文化友の会
NPO法人 砺波土蔵の会
協賛 富山県民芸術文化祭実行委員会

平成二十二年十月十五日―十二月二十八日
第三十四回郷土先人展
真宗の説教者たち
砺波郷土資料館

主催 砺波郷土資料館
砺波の真宗風土展実行委員会

平成二十二年十一月十三日―十二月十九日
パネル展示 越中の一方向一揆
となみ散居村ミュージアム

主催 となみ散居村ミュージアム
砺波の真宗風土展実行委員会
後援 NPO法人 砺波土蔵の会

砺波の真宗風土展 関連催し

主催 砺波の真宗風土展実行委員会

会場 砺波市美術館

十一月 十四日(日) 太子絵伝 絵解き 竹部俊恵(井波・妙蓮寺住職)

十一月二十一日(日) 講演会 松浦正昭(富山大学教授)

十一月二十八日(日) えんじやら節 佐藤博義正(義正会会主)

十二月 十二日(日) 節談説教 範浄真了(能登・善法寺住職)

砺波の真宗風土展 バスツアー

主催 北日本新聞社

十一月 十四日(日) 瑞泉寺ほか、太子絵伝 絵解き 竹部俊恵(井波・妙蓮寺住職)

十一月二十一日(日) 厳照寺ほか、講演 松浦正昭(富山大学教授)

十二月 十二日(日) 善徳寺ほか、節談説教 範浄真了(能登・善法寺住職)

凡例

*本展の図録は、第一章「砺波の真宗について」、第二章「井波別院瑞泉寺」、第三章「城端別院善徳寺」、第四章「ムラからみた真宗」、第五章「砺波地方の説教者たち」、第六章「となみ散居村学習講座資料」の順に、各シリーズの作品の図版を掲載し、砺波の真宗風土展ワーキング・グループが編集した。

*展示構成上、また紙面構成上、掲載順と展示の順番が入れ替わる箇所がある。

*キャプション執筆者は次のとおり。尾田武雄(○)、小西竹文(K)、安カ川恵子(△)、末永忠宏(M)。

砺波の真宗風土展 実行委員会

飯田敏雄（砺波市文化協会長）

藤田誓壽（井波別院瑞泉寺輪番）

鶴松 瑩（城端別院善徳寺輪番）

山森伸正（南砺市教育委員会文化課文化振興係副主幹）

尾田武雄（砺波市文化財保護審議会委員）

砂田龍次（となみ散居村ミュージアム館長）

高原 徹（砺波郷土資料館長）

小西竹文（砺波市美術館長）

（敬称略）

いあいさつ

砺波の真宗風土展 実行委員長 飯田敏雄

朝の目覚めは、祖母の読経の声からでした。仏間から鐘の音と共に聞こえてくるのです。「早よ起きられんか。学校遅れるがいね。」そして又お経は続きます。まだ覚めやらぬボーとした顔。味噌汁の匂いとまな板で菜を刻む母の白いエプロン。真宗門徒の朝の風景です。

砺波地方の穏やかな一日はこのようにして始まります。そして、この様な光景は、何も特別なものではなく、ごく普通の姿でした。何のこだわりもなく、肩もいからず、ゆっくりと血脈の中に流れる生命いのちの泉のようなものでした。

哲学者の梅原猛氏と数学者の藤原正彦氏の対談を拝聴する機会がございました。お二人は、戦後の日本の教育には大きな二つの誤謬しごびがあると言われました。それは宗教教育と道徳教育の否定という二点を指摘されました。そして、人間の生き方としての座標軸に、道徳を縦軸とするならば宗教を横軸として生かす教育を確立しなければならぬと言われました。私達はもつと真剣に考えてみなければならぬ今日の課題だと思えます。

平成の世も二十二年を経ました。物の豊かさと心の豊かさは乖離かいりして、心は貧しく

なる一方です。何に縫すがればよいのか。迷える子羊達は途方にくれています。この企画展が少しでもお役にたてば、ほんとうに嬉しく思います。

お力を与えて下さったお寺様ありがとうございました。あつく御礼申し上げます。

目次

ごあいさつ	砺波の真宗風土展 実行委員長 飯田敏雄	4
開催にあたって	砺波市美術館長 小西竹文	8
第一章 砺波の真宗について	砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄	10
・ 砺波の真宗		
・ 胎動する庶民―幕末から明治		
・ 東本願寺両堂再建とお講		
・ 妙好人砺波庄太郎ととなみ詰所		
【阿弥陀如来立像と地獄絵】	砺波市 常福寺住職 高島静心	33
第二章 井波別院瑞泉寺	砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄	34
・ 井波別院瑞泉寺再建と太子堂建設		
【太子絵伝 絵解き】	南砺市 妙蓮寺住職 竹部俊恵	48
第三章 城端別院善徳寺	砺波市美術館学芸員 末永忠宏	50
・ 宝物巡回と巡回布教		
・ 善徳寺の文化財		
【三帖色紙和讃と柳宗悦】	南砺市 大福寺住職 太田浩史	55

第四章 ムラからみた真宗 砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子……………56

ムラのお講―砺波市美術館のある砺波市高道集落の例―

・若衆報恩講(高坪照吾会)

・尼お講(高道地区尼講)

【尼お講の思い出話】 砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子……………61

第五章 砺波地方の説教者たち 砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子……………62

・砺波地方の説教者たち

・昭和三十年から三十五年までに
出町 眞壽寺を訪れた説教者たち

第六章 となみ散居村学習講座資料 となみ散居村ミュージアム館長 砂田龍次……………66

・田屋河原古戦場

・越中の一向一揆

・経過報告 砺波市美術館学芸員 末永忠宏……………70

・庶民からみた砺波の真宗風土 砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄……………72

・ムラの信仰と家の信仰 砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子……………74

・出品目録……………76

・聖徳太子南無仏一覽 砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄……………78

・聖徳太子石仏分布図 砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄……………87

開催にあたって

砺波市美術館長 小西竹文

南砺市城端の岩城信嘉さん（一九三五―二〇〇八）の遺作となった十九枚の木版画の中に「昔から一粒のお米に五体仏様がおいでになって、我々の命をお守りくださると聞いて育てていただいてきました」と彫られた作品があります。

そして、「長い時が過ぎ、世の中が変になってきました。お米を大切に出来なくなってきたのです」と世情を慨嘆し、「事故米が、給食にまでも入ってしまった。この騒動は恐れを知らぬ仕業である。信じられるものがなくなった」と続いています。

給食のときの「いただきます」「ごちそうさまでした」が話題になったのは何故だろう、と気になるようになりました。保護者が払う給食費には、米や野菜や肉の代金が入っているから、礼を言う必要はないと思っているのかもしれませんが。

私たちは動植物の命をいただき、動植物は太陽や水などの恵みをいただいで生きています。米という字は、八十八の字数をかけて出来上がることを表すとか。だから食事のとき、自然の恵みと農家の苦労に手を合わせて感謝の言葉を称えるのではないのでしょうか。

近年は人々の暮らしのあり方が共有しにくくなりました。何でも時代のせいにしていれば楽です。時代を他人と言い換えても、その意味は変わりません。何でも自分以

外のせいにしたがる甘えが、地域の人間関係を希薄にしています。

風土とその中で育まれた人々の暮らしのうちにある、ごく当たり前なものを考えることが、これからの時代に価値あるものを生み出す手立てになるかもしれません。

幕末から明治にかけて、各地域で若い人材が輩出しました。閉塞感がただよう今より、「坂の上の雲」の秋山兄弟や子規がいた明治の時代の方が生き生きとしていたように見えます。砺波では東本願寺の両堂再建に尽くした妙好人・砺波庄太郎（一八三四—一九〇三）がいます。

砺波地方の暮らしの中で、浄土真宗の影響は無視できません。「講」というコミュニティの中で人が輝いていた時代があり、講が輩出した妙好人たちの果たした役割があります。本展は、ただ信心に生きた愚直の人々が残してくれた真宗風土を企画展示しました。

砺波の真宗風土について、昨年九月から砺波市文化財保護審議委員の尾田武雄さん、砺波郷土資料館、とнами散居村ミュージアム、砺波市美術館の学芸員が寄り合つてワーキングを行い、今年三月からは砺波市文化協会長の飯田敏雄さんを中心に実行委員会を組織し、庶民の視点から歴史、民俗、美術にアプローチしてきました。

信仰の対象となっている宝物を出品していただいた関係各位に心から感謝申し上げます。三館連携の企画は初めてのことであり、まだまだ不十分ではありますが、私たちが住む砺波の真宗風土を考える一助となれば幸いです。そして、次の共同企画につながることを願っています。

第一章 砺波の真宗について

砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄

富山県砺波地方の砺波市・南砺市では寺院数二百二十八か寺があり、東本願寺(真宗大谷派)西本願寺(浄土真宗本願寺派)の寺院百九十一か寺があり、まさに「真宗王国」といわれる所以である。この地方では真宗流布以前は浄土系の信仰が広がっていた。

砺波地に真宗が広がったきっかけは、明徳元年(一三九〇)に五代禪如の井波瑞泉寺建立したことであり、その後文明三年(一四七二)蓮如が越前吉崎に下向。雪崩現象のように真宗が広まった。瑞泉寺では、江戸時代末の弘化四年(一八四七)に、本堂と共に太子南無仏を安置した太子堂が並列して建立された。毎年七月に行われる「太子伝会(タイシテン)」はこの地方の夏の最大のイベントであった。明治十二年、瑞泉寺香部屋より出火して本堂、太子堂が全焼した。その後南無仏太子像や絵伝が地方を巡回して太子像の開扉と絵伝の絵解きを行うようになり、巡回先周辺で太子講が作られ、太子南無二歳石仏の造立が急速に盛んになった。

東本願寺では、元治元年(一八六四)七月に起こった「蛤御門の変」による火災で、四度目の両堂を焼失した。明治十二年(一八七九)、両堂再建に向けての動きが始まり、全国の門徒は四、五十軒あった詰所に馳せ参じ、明治二十八年(一八九五)、両堂は落成した。明治の妙好人砺波庄太郎の輩出もこの時期である。

本山の相続講は明治十八年（一八八五）に法義相続・本廟相続の趣旨で設立された募財のお講のことで、ご消息などが多く残されている。

またこの地方は獅子舞や盤持・草相撲・チョンガリなどが盛んな地域である。これらは古い歴史を持つものもあるが、多くは明治期に広まったものが多いのである。若衆報恩講などもこの時期に盛んに勤められ、村のコミュニティがお講の絆によって、しっかりと息づいていた。

戦後まもなく、民藝運動を起こした柳宗悦が「天文版三帖色紙和讃」（城端別院善徳寺蔵）を見て感激の声を放っている。名著『美の法門』も善徳寺で執筆され、真宗に根付いた土徳の心情が今もこの地に息づいている。

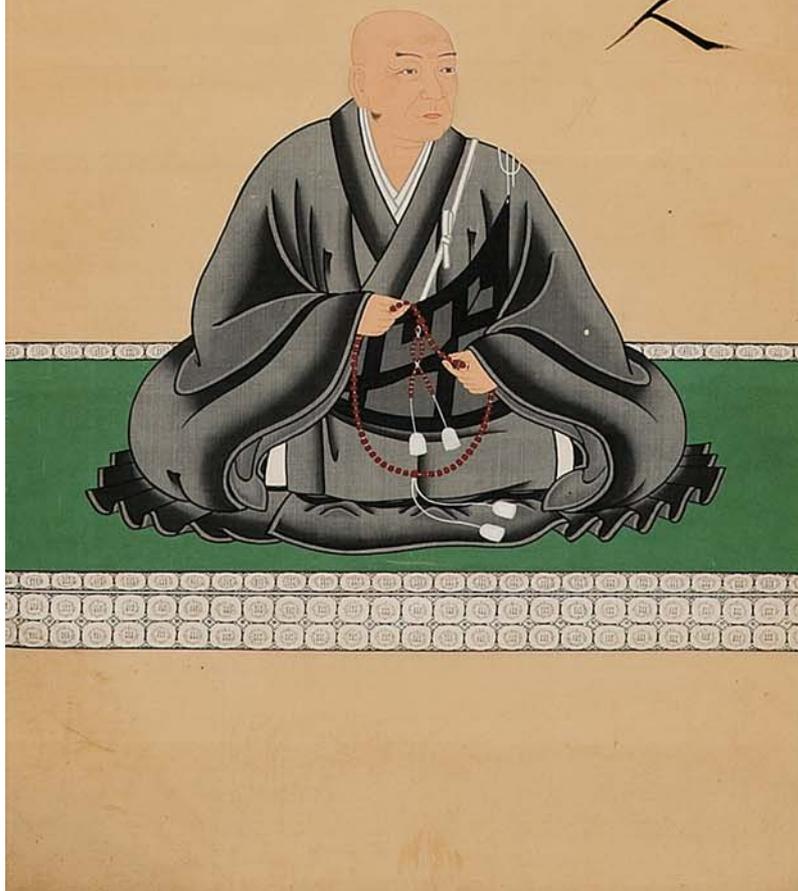


1 親鸞聖人御影（砺波市東保 浄光寺）江戸時代

裏書によると、延宝三年（一六七五）に東本願寺十五世常如から浄光寺へ下付されたものであることがわかる。願主は当寺十世の遊傳である。（Y）

以大莊嚴
具足衆行
令諸衆生
功德成就

蓮如上人



3 蓮如上人御影（砺波市東保 浄光寺）江戸時代

裏書によると、嘉永三年（一八五〇）に東本願寺二十一世嚴如から浄光寺へ下付されたものであることがわかる。願主は当寺十三世祐教である。（Y）



4 蓮如上人名号 (砺波市東保 浄光寺) 室町時代

蓮如上人直筆 (北西弘氏鑑定) の「南无阿弥陀仏」
六字名号である。(Y)



5 一如上人からのご消息

(高岡教区第四組蔵)

東本願寺十六世一如から東保
村浄光寺十四日講中へ下付さ
れたご消息。

(年不詳)六月二十四日。(〇)





6 二河白道図 (砺波市大窪 常福寺)

激しく波打つ水、燃え盛る火の二河、群賊悪獣は、絵解きのために誰にでもわかりやすく描かれたもの。如来の代わりに僧侶が描かれており、定型とは少し異なる構図を持っている。(K)



7 十一面観音石仏（砺波市秋元）

高さ二四四cm・幅一一七cm。銘文に「明治十八年九月建之」「願主當所若連中」「石工森川栄次郎」とあり、明治十八年に秋元南（俗に秋南）地区の若連中により建立された。石工は一生の間一千体の石仏を彫った明治の名工森川栄次郎である。（〇）

8 砺波市内の力士碑

砺波市内には九十四基の力士碑があるが、そのうち八十六基に「南無阿弥陀仏」と彫られている。幕末から昭和初年にかけて、弟子たちや若連中によって建てられたものが多い。(Y)



浦ヶ関久兵衛碑
場 所…砺波市石丸 石丸神明宮南
建立年…明治二年二月

増ヶ浦増右エ門碑

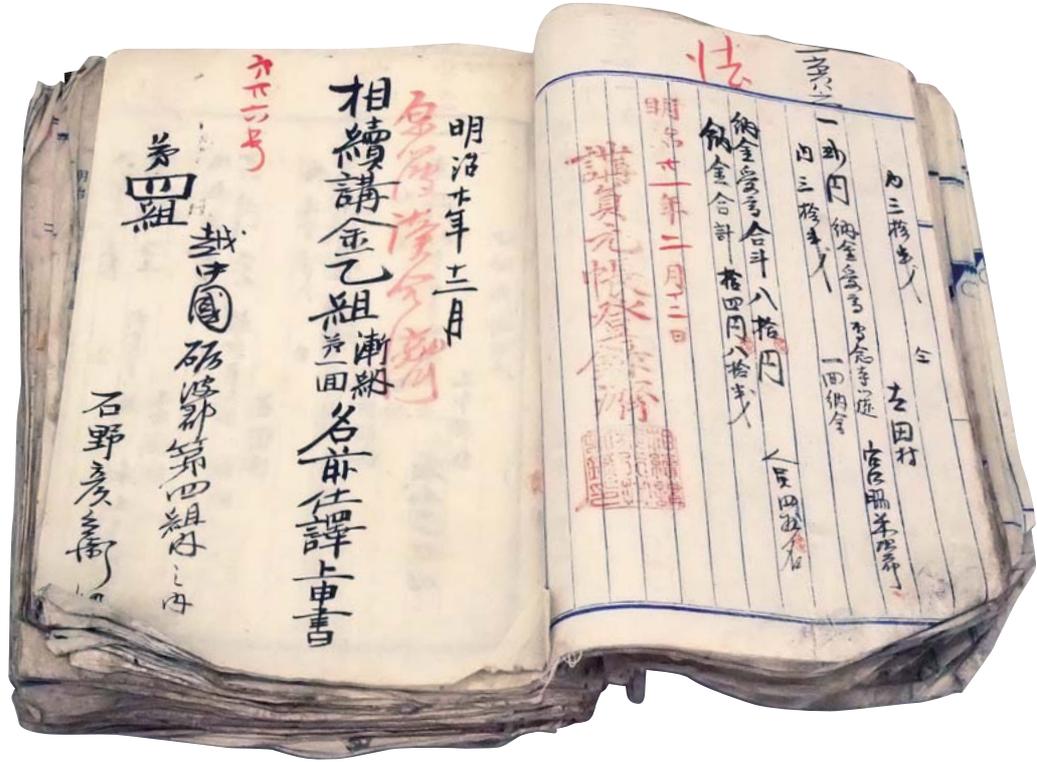
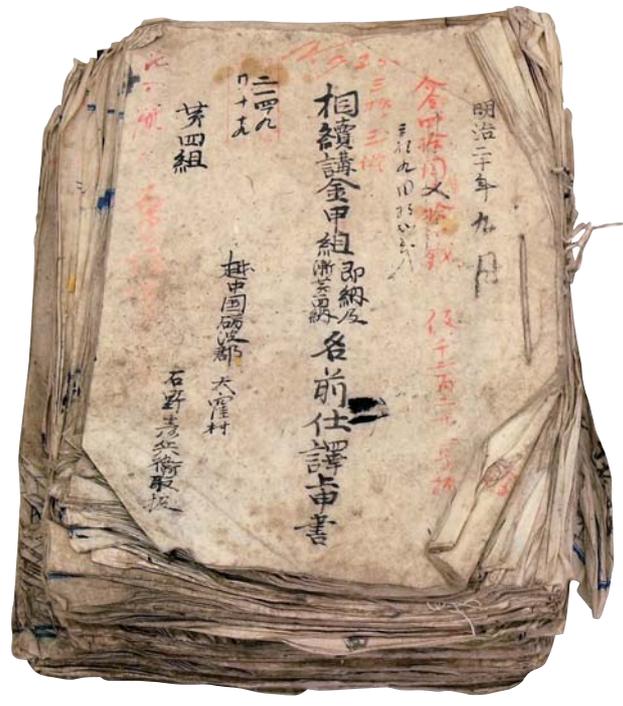
場 所…砺波市荒高屋
建立年…文政四年（一八二二）三月



石割治郎吉碑

場 所…砺波市矢木
建立年…明治九年一月





9 相續講の帳面

(砺波市大窪 個人蔵)

明治十八年十一月以降に本山つまり東本願寺の法儀相續と本廟護持のために設立された講で、本山に直属する会員信仰組織である。講の収入の多くは本山護持費用に充てられ、地域の門信徒はこぞって参加した。(〇)



10 毛綱 (京都市 東本願寺)

明治十二年から十五年かけて、二十八年に完成した世界最大の木造建築である東本願寺の御影堂と阿弥陀堂、つまり両堂再建に必要とされた女性の黒髪で編んだ毛綱である。全国から五十三筋寄付されたが、富山県内からは最も多い十六筋も寄進されている。(O)



11 御本山志納箱

(砺波市新明 聞願寺)

砺波市新明の聞願寺御堂の柱に掛けてあった御本山志納箱。向かって左側面に「明治十四年(一八八一)三月」、右側面に「寄進人若連中」と記されている。(K)



12 本廟御相続志納箱

(砺波市新明 個人蔵)

砺波市新明の清原勝利宅にある本廟相続志納箱。聞願寺の熱心な門徒であった先祖の手づくり品で、両堂再建のための門徒貯金箱か。(K)



13 砺波庄太郎(肖像画)

(砺波市頼成 個人蔵)

「我が家の主人は阿弥陀様なり、我が身は番頭と心得よ」と語り、京都砺波詰所の主として活躍した砺波市頼成出身の砺波庄太郎(天保五年―明治二十七年)の肖像画。中尾玉僊作。(〇)



14 砺波庄太郎(肖像写真)

(砺波市頼成 個人蔵)

「我が家に仏壇があると思うな、仏様の家に住まわせてもらっていると思え」と語った明治の妙好人砺波庄太郎は、写真が嫌いであった。現在残る唯一枚の写真である。(〇)



15 砺波庄太郎法名軸

(砺波市頼成 個人蔵)

明治の妙好人砺波庄太郎の法名「威徳院釋正受」である。庄太郎は生前より院号法名を頂いていた。(〇)



16 砺波庄太郎肩衣

(砺波市頼成 個人蔵)

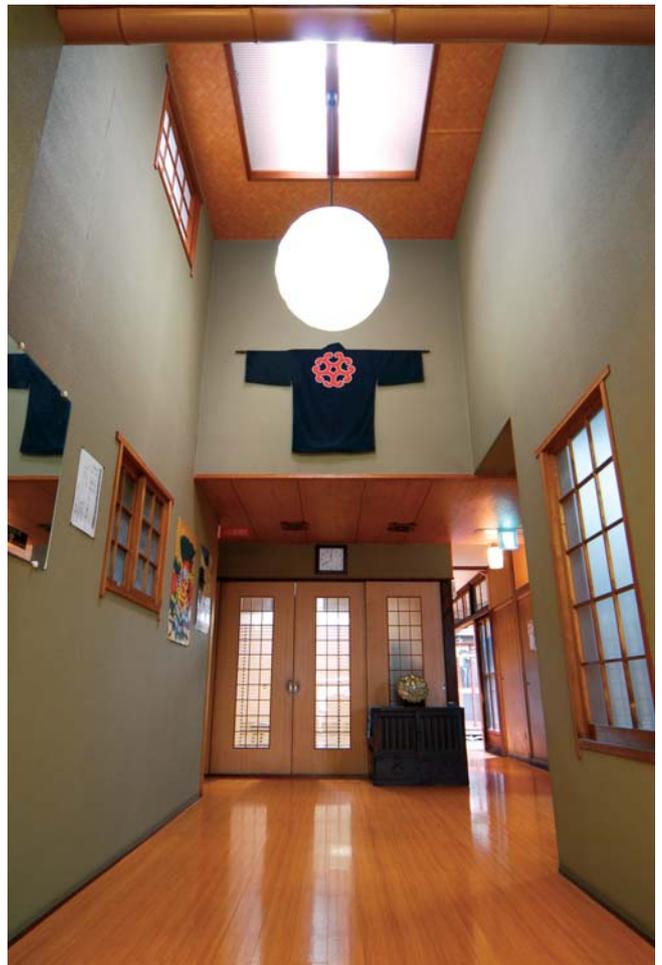
(〇)



17 砺波庄太郎財布

(砺波市頼成 個人蔵)

(〇)





18 となみ詰所

(右ページ上)

となみ詰所の玄関

風間耕司撮影

(右ページ下)

玄関の吹き抜けロビー

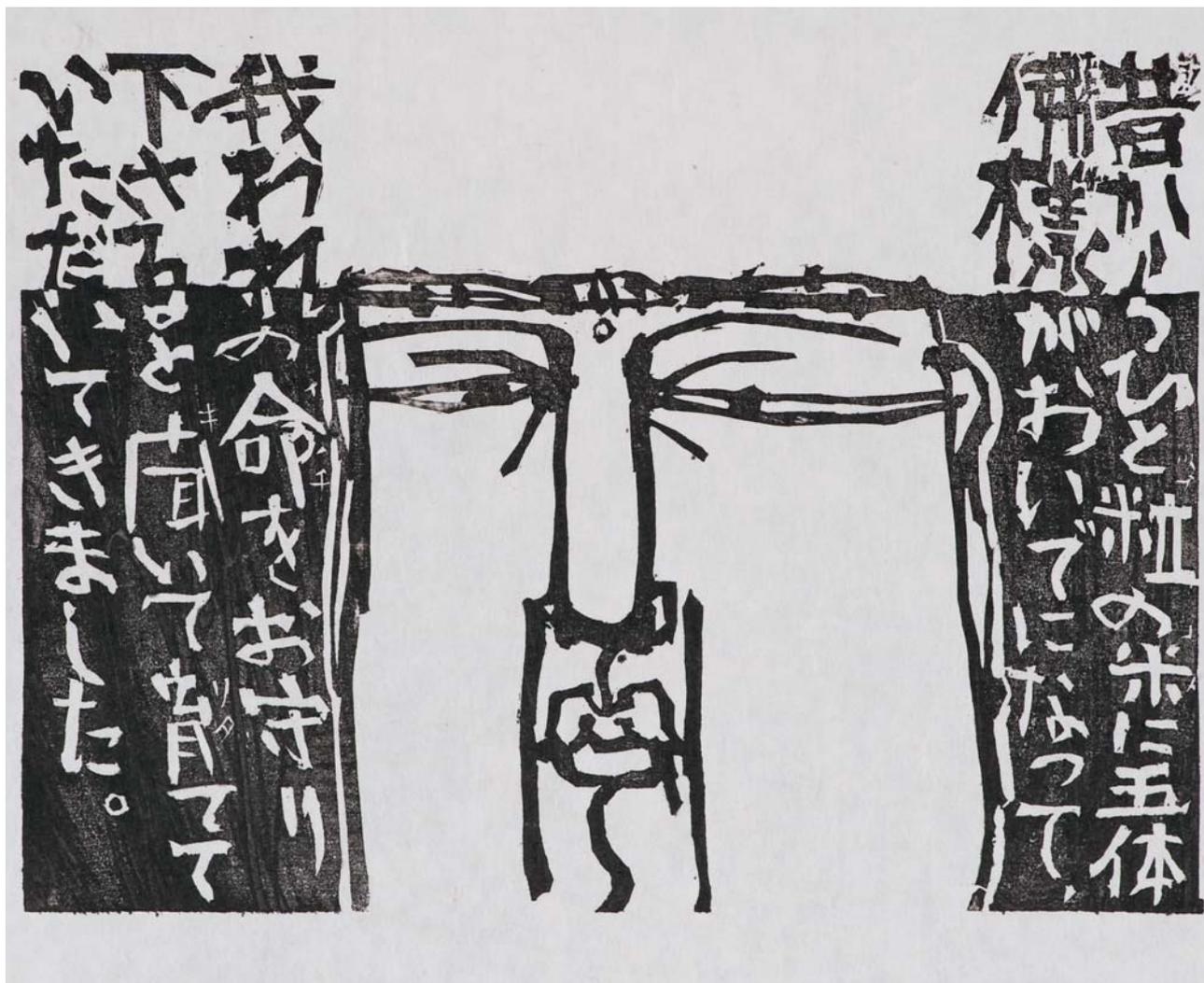
風間耕司撮影

(左ページ)

となみ詰所の仏間と広間

風間耕司撮影

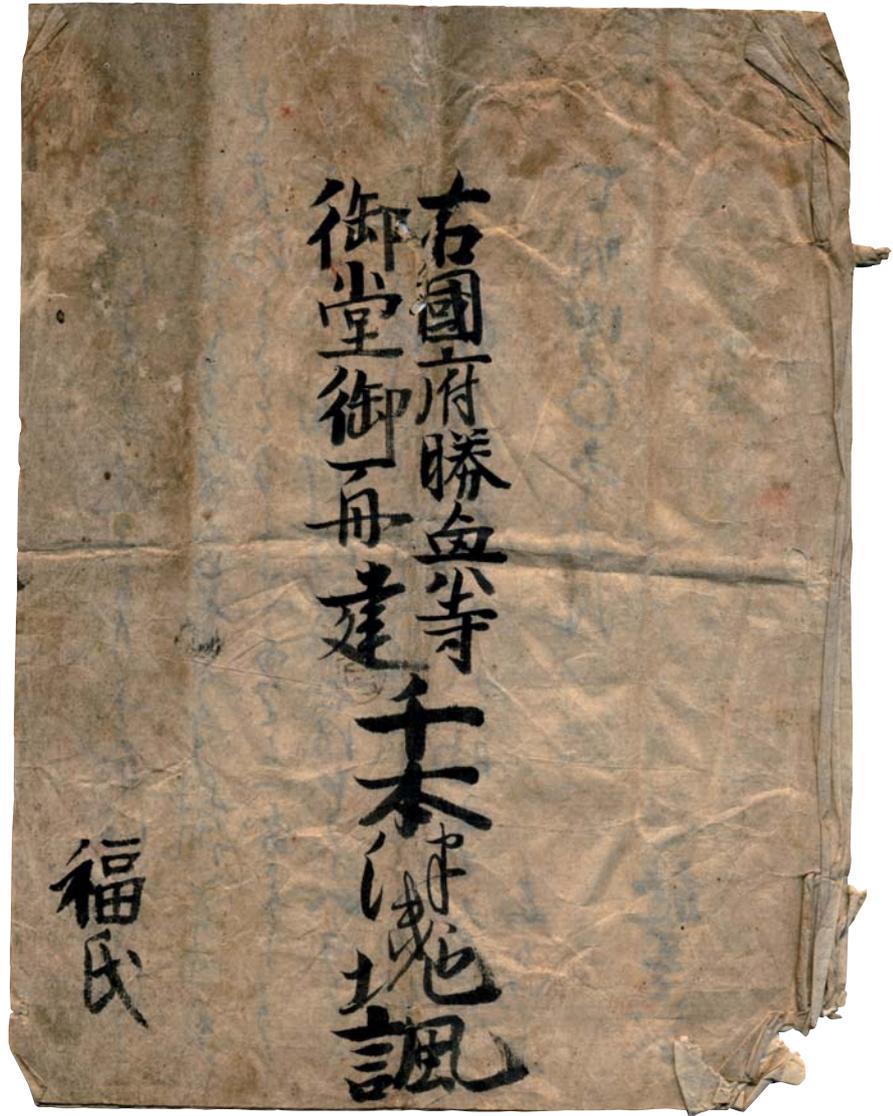
―御示談や談合が行われた―(〇)



19 世情慨嘆木版画

(南砺市城端 個人蔵)

立体造形作家・岩城信嘉
(一九三五—二〇〇八)の
遺作となった十九枚の木
版画の一枚。米づくりの尊
さと、その尊さを忘れた国
の減反政策や事故米騒動
への怒りをぶつけた物語
仕立てになっている。(K)



20 石つき歌

(砺波市柳瀬 個人蔵)

高岡市伏木の勝興寺御堂再建(二七八四)の千本つき地唄集。「数の念仏で参るでないぞ、ご恩思えばただ念仏」など歌の文句は勝興寺の御示談を彷彿とさせる。版元は高岡の太田屋清兵衛。(K)

「古国府勝興寺御堂御再建千本つき地唄 福氏」

勝興寺み堂ご再建により千本つきを始めたまふ。

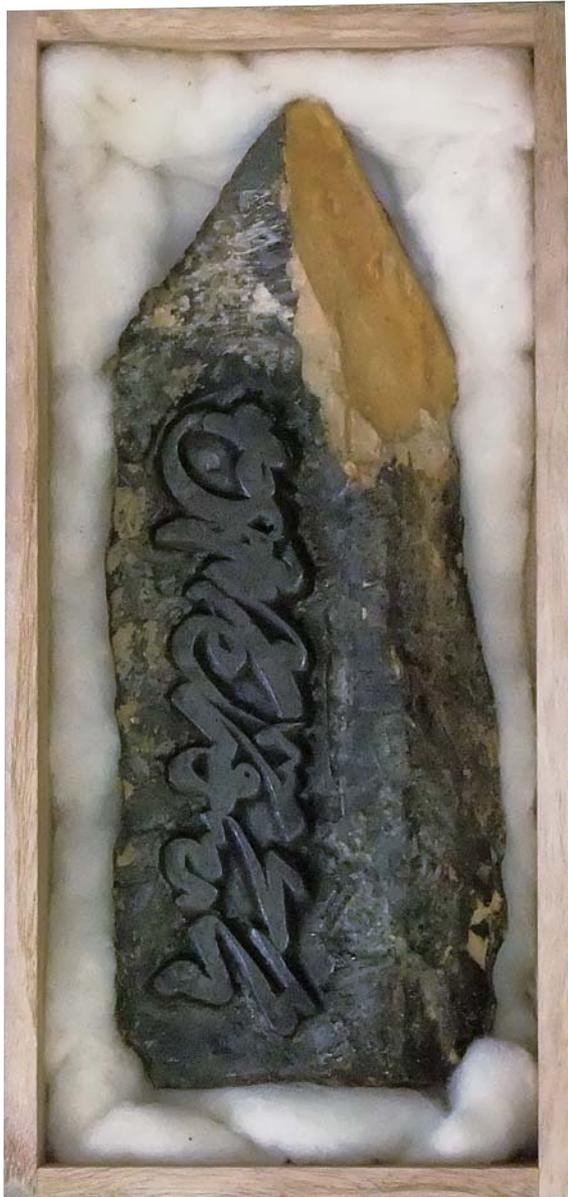
ここに伊賀の国 三左右衛門は うすひき唄を借用して その地唄とする
それ 千里も一歩より始まるとなれば、同行の懇志 積もれば 塵も
山となるごとく 諸人に進めていこうである。
誠に仏恩教導の一助にもならないかと。

天明四年(一七八四年)冬十一月 施主 正念

千本つき地唄

- 一、 鐘で知らずも太鼓で呼ぶも ヨイナよそに迷いし。ヨイイ。
付くゆえに ヤットコセイ。アリアリヤ。ヨイトナ。
- 二、 数の念仏で参るでないぞ。御恩思えば。ただ念仏。
- 三、 愚痴のこの身に 聞かさんため。ご誓願かや。ありがたや。
- 四、 こひな 諸恩のおん手にもれた。わしをたすける。阿弥陀様。
- 五、 み法。聞く身を 育てしご恩。忘れまいぞや。その一期。
- 六、 寝ても覚めても 称えと あるに。忘れ暮らすは あさましや。
- 七、 現世祈りや 物忘れまい。弥陀の光の。中なれば。
- 八、 努め励んで 行かれぬお国。教えひとつで。参るかや。
- 九、 教えあるとて 少しの悪も。好むまいぞや。身の一期。
- 十、 山や海にも 越えたるご恩。忘れ暮らすは。あさましや。
- 十一、 やがてお側へ 召し下さるる。何と物忘れまいもの。
- 十二、 舟を浮かべて 帆を掛け持つに。野良で悲しむ。死出の旅。
- 十三、 額下すまして 気ままにするは。聞かん昔が。ましちや物。
- 十四、 腹の立つとき しばらく死んで 長いこの世と 思うまい。
- 十五、 人の悪しきは 我がなす業よ。幾代経めらん。前の悪。
- 十六、 み法が進み 念には聞けど。心留めねば。せんそなや。
- 十七、 思い出せば 我が友達の。亡きが多きなりにけり。
- 十八、 聞かぬ人より 聞くのまさしか。人の悪さを言うよりも。
- 十九、 後生願うは 老いての事か。延ばす人こそ。お笑止しや。
- 二十、 思う内なら いろ外に出る。念仏申さん。信もない。
- 二一、 合点せんと 八千六百度 仏嫌いな わしゆえに。
- 二二、 うれし尊とや 月日のたつは。やがて参るぞ。彼の国へ。
- 二三、 やがて参らせ下さるからは。悪い身持ちを。せまいぞや。
- 二四、 髪を結いたて 菩薩に似たが。すぐに。大蛇になるとかや。
- 二五、 すぐに大蛇を助けたための。變成男子の願もあり。

版元 高岡 □□太田屋清兵衛

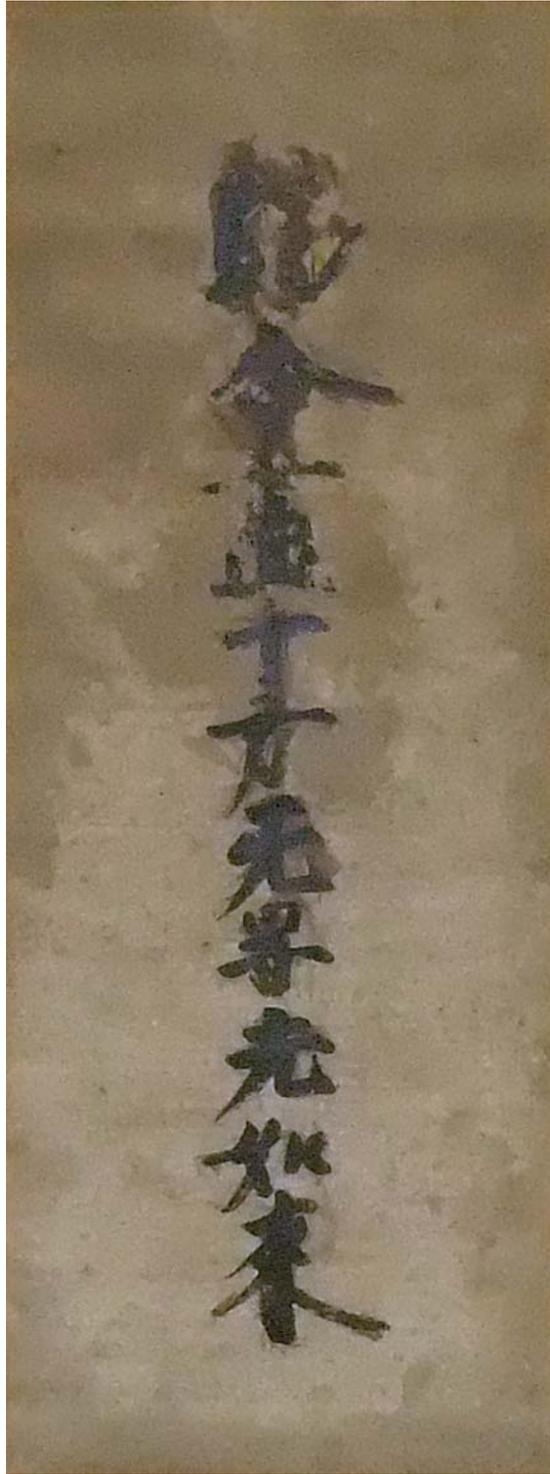


21

石摺の名号

(砺波市新明 聞願寺)

南無阿弥陀仏の六
字名号を刷った版石。
蓮如上人の筆と伝
えられている。砺波
市新明の聞願寺の
法宝物。(K)



22 血染めの名号 (南砺市 漆谷念仏道場)

五箇山は真宗信仰の強い地である。その南砺市漆谷の念仏道場は古くから集落の信仰の拠り所であった。一向一揆に参戦する門信徒が、蓮如上人の名号などに血判を押して出陣したとされており、これを血染めの名号という。(〇)



23

地獄絵図

(砺波市大窪 常福寺)

地獄は、現世での悪行により死後送られる因果応報の世界である。罪状の深さに応じ、煮えたぎる釜や火炎の海へと。仏法非難は最も重罪で、阿鼻地獄へ落ちるとされている。(K)





24 木造阿弥陀如来立像（砺波市大窪 常福寺）鎌倉時代

鎌倉時代初期の阿弥陀仏で、運慶の子である湛慶の作といわれる。檜の寄木造、像の高さは七八〇。額の白毫には水晶をはめ込んであり、衣文には截金文様が施されている。
昭和二十五年に国重要文化財に指定された。（Y）

阿弥陀如来立像と地獄絵

砺波市 常福寺住職 高島静心

常福寺の御本尊は、今から約八百年前の鎌倉時代の作と伝えられています。佛師と
いうのは、御経を熟読し、その御経にもとづいて仏像を制作したという事でありま
す。親鸞聖人のことばの中に「大無量寿経真実の教浄土真宗」とあります。阿弥陀如
来の御姿は大無量寿経、その他の御経にもとづいて制作されておりますから、私達は
御経をおがんでいるのであります。

鎌倉時代より伝わって大正十三年に国宝に指定されたのは、国宝になるから大切に
して伝えたのではなく、信仰の力が伝えて来たのであります。常福寺の仏様は「大窪の
黒ぼとけ」といわれていたという話が村に伝わっていますが、たくさんの方が御参りさ
れ御香にいぶされ真つ黒になっていたのであります。今日まで残った一因になっ
たのであります。それにもまして、砺波平野は庄川が氾濫し自由きままに流れ、又
戦国時代は城や寺が焼かれた中から民衆の力によって御本尊を守りつづけて今日にい
たっております。自然災害や、戦国時代をかくぐつて来たのは御先祖の命がけの御苦
労があったからであります。あつい信仰によって守り続けてきたのであります。

砺波庄太郎は「我が家の主人は、阿弥陀様なり、我が身は番頭と心得よ」という言
葉を残して下さいましたが、私共の心は自分が親方になり経済にふりまわされ、名譽
にふりまわされ、人と人とのつながりをわすれてしまっております。御先祖様が守っ
てきたのは鎌倉時代の古美術品を守ってきたのではなく、阿弥陀様の御心を守り私達に
送って下さったのであります。今の私達はこれを受け、私達の子供、孫に伝えていく
のが私達の大きな仕事であると思います。

第二章 井波別院瑞泉寺

砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄

杉谷山瑞泉寺は、明徳元年（一三九〇）に本願寺第五代綽如によって建立されたもので、井波の山中杉谷の地に庵を結び、布教活動されていた。中国からの国書が朝廷に届いたが、難解な手紙だったので、誰も読めない。それを綽如が解読されたといわれている。時の後小松天皇は大変喜ばれ、その褒美として木造聖徳太子二歳の南無仏を賜ったという。そして北陸井波の地に寺院を建立することの勅許を得、綽如は勸進状をしたためて浄財を集め、後小松天皇の勅願所として建てられたものだという。また瑞泉寺は、北陸の浄土真宗の中心として、往時は、坊主大名でもあった。

江戸時代初め頃より、城端善徳寺と共に越中東方寺院の触頭の位置にあった。この瑞泉寺の特色は太子堂であり、弘化四年（一八四七）以来、本堂と並列し、太子南無仏を安置した太子堂が建っている。七月下旬に行われる「太子伝会」は、聖徳太子の絵伝や寺宝の虫干しを兼ねて一般公開された。瑞泉寺の太子伝会は夏の砺波地方最大のイベントで、サーカスや見世物小屋、屋台店などがぎっしりと並んだ。富山県西部の庶民には、田植えのあとの草取りが終わった頃の楽しみであった。

ところでこの太子伝会は江戸時代中期瑞泉寺第十一代應真院常照（俳号浪化）の子息應現院真照（俳号桃化）の代に始められた。この應現院真照は弁才に優れ、寺宝の開帳の際に、聖徳太子の遺徳を偲ぶ八幅の絵伝を解説したのが始めといわれている。

それが恒例の砺波地方の夏の風物詩であり、信仰の場でもあった。

明治十二年（一八七九）九月一日、瑞泉寺香部屋より出火して本堂、太子堂が全焼した。それをきっかけに南無仏太子像や絵伝を秘蔵しておくべきでなく、広く衆生に開放してその報謝を受け、経営の援けにしなければならないという意見がおこり、地方を巡回して太子像の開扉と絵伝の絵解きをおこなうようになった。

この巡回にやや遅れて、巡回先周辺では太子講が開かれ、また太子南無二歳石仏の造立が盛んになるのである。太子像は神社のご神体を招くように丁重に迎えられ、そして熱狂的に歓迎されたのである。



25

瑞泉寺本堂に懸かる半鐘

明治十二年九月一日、瑞泉香部屋より出火して本堂、太子堂が全焼した。翌十三年五月に棟梁松井角平により本堂の起工が行われ、十八年に本堂が落成した。瑞泉寺本堂に懸かるこの鐘は、明治十八年の銘が入り、本堂落成を機に铸造されたものである。(〇)



完成した太子堂（大正七年）『写真は語る井波の近代』より



太子伝会の賑わい（大正十三年）『富山県写真帳』より

26

太子堂建設当時の写真

明治十二年に瑞泉寺は山門を残し、本堂、太子堂、庫裏など焼失した。本堂は明治十八年に再建できたが、太子堂の建設はままならず、大正七年にようやく完成を見た。井波建築や彫刻、塗師などの優れた技を集め、七年の歳月をかけ建築された。(〇)



27 太子巡回 道具一式

(南砺市井波 井波別院瑞泉寺)

聖徳太子南無仏(厨子入り)像と太子絵伝八幅のうち二幅が各地を回り、それぞれの宿^{やど}で絵解きされている。

(写真は砺波市庄東地区)(O)



28

聖徳太子南無仏（石造）（砺波市狐島地区会）

平成二十二年七月二十二日の太子講の風景。石仏（高さ五八cm・幅二二cm）はその作風から明治の名工森川栄次郎作であろう。お講は憶念寺の住職の読経によって行われる。（〇）



30 聖徳太子巡回お講（映像）

（砺波市新明 聞願寺）

平成元年二月十九日、井波別院瑞泉寺 聖徳太子巡回お講が飯田和夫氏宅で行われた。家への巡回が行われなくなった現在、その様子が確認できる貴重な記録である。お宿を務めることは一家の主として誇り高いことでありひとつのステイタスでもあった。太子絵伝の絵解きの名僧吉澤孝譽師（一九〇四—一九九二）の法話を聴くことができる。（M）





31 聖徳太子南無仏（石造）

（砺波市五郎丸）

井波別院瑞泉寺太子堂に安置される太子南無仏の模刻石仏である（高さ六五cm・幅二四cm）。散居村の展開する砺波平野を中心に、路傍などに二百四十六体が確認されている。造像は明治二十年後半から大正期の約三十年の間であり、明治期における太子信仰のあり様が理解できる。（〇）



32

聖徳太子孝養像（木造）

（砺波市宮村 景完教寺）

加賀国横根村に住んでいた当寺の開基了通が、俊寛僧都から拝受したと伝えられる木造の聖徳太子孝養像。太子十六歳の立像である（高さ八〇cm・幅三五cm）。作者は不明。（〇）

第一幅



第二幅



33 聖徳太子絵伝

(南砺市井波 井波別院瑞泉寺) 昭和時代
聖徳太子の一生を絵に描いたもので、八幅から成る。現在瑞泉寺には室町時代(重要美術品に指定)と江戸時代のものもあるが、今回展示したものは、昭和七年に巡回用に各地区の門徒衆から寄進されたもの。太子像とともに各地区をまわり、各宿で絵解きされたものである。

奇数幅(第一・三・五・七幅)の事蹟場面は画面の上から下へ、偶数幅(第二・四・六・八幅)は下から上へと配置されている。(Y)

第四幅



第三幅



第六幅



第五幅



第八幅



第七幅



太子絵伝 絵解き

南砺市井波 妙蓮寺住職 竹部俊恵

七月も十日を過ぎると、井波はどことなく慌ただしい。太子伝会の準備のためだ。このような井波の夏の風情は、各々の時代性こそ違え、多くの門信徒に支えられ、二百五十年の時を経た今年も同様に続いている。

太子伝とは、文字どおり聖徳太子伝略のことを言う。聖徳太子は日本仏教の祖であり、多くの高僧が讃嘆した。一方、庶民にも親しみ深い。特に、砺波地域では、「お太子さま」「太子さん」と呼んだり、石仏の太子像を奉安したりして、その姿は顕著である。このように、多くの人々から尊敬された聖徳太子は、「太子信仰」と言われるほどの広がりを見せ、「聖徳太子伝略」が出来上がり、さらには「伝絵」や、その絵を解く「絵解き」も出現することとなった。また、浄土真宗が特に聖徳太子を崇めるのは、親鸞聖人自身が二十九歳の時に、京都・六角堂、頂法寺百箇日参籠の折り、聖徳太子の夢告を受けられたからである。

瑞泉寺太子絵伝は、寺伝によれば瑞泉寺を創立した綽如上人が、明からの難解な国書の解読と仏説無量壽経講説の賞として、明徳元年（一三九〇）、後小松天皇から太子自彫二歳の尊像と共に拝受したと言われている。明和元年（一七六四）ごろには、瑞泉寺では法宝物虫干しが行われていて、井波の通りはにぎわったと言う。そのころ、十二代住職應現院（十一代浪化の息子）は弁才に優れていて、毎年六月二十二日から二十八日まで法宝物虫干しを「太子伝会」と名付け、八幅の聖徳太子絵伝の絵解きを始めた。現在は七月二十一日から二十五日までの間、六十三座ほどを別院三箇寺と別院常勤僧侶（列座）が絵解き師となり、絵解きを行っている。また、九月一日の二百十日の太子伝会と、別院以外で行われる太子巡回でも絵解きを行っている。



太子巡回絵解き
(砺波市庄東地区)

第三章 城端別院善徳寺

砺波市美術館学芸員 末永忠宏

城端別院善徳寺は富山県南砺市城端にある東本願寺（真宗大谷派）の寺院である。文明年間（一四六九―一四八七）本願寺蓮如が建てた坊舎に始まり、数度の移転の後現在地に移った。五百年以上もの歴史と伝統を有する古刹である。今なお、蓮如上人が明かされた宗祖親鸞聖人の教えが生き生きと伝えられている。

城端別院善徳寺の寺務所の人をはじめ、実際の護持と運営に関わる人はいう、「お寺は動いてなきやあかん」と。

寺というものは、ご門徒の上にあぐらをかいているようであってはならない。常日頃から絶えずご門徒と接し、人間的な関係を取り結んでいることこそが真宗同朋を目指す寺の唯一のあり方であるとする。人間的なつながりの場がそのままご同朋・ご同行の地平であるとするのである。そのために、善徳寺は毎日、朝と午後には必ず読経と法話を行っている（日常勤行）。また、年中行事の期間には、連日、法要と法話がなされる。つまり、一年三百六十五日の間、善徳寺に参詣すれば必ず読経に会うことができ、法話を聴聞することができる。また寺はご門徒のお参りを待っているだけでなく、仏法への崇敬と同朋の形成を推進するために、寺の外へも積極的に活動を展開していく。この考えのもと行われるものが法宝物巡回布教であろう。

虫干法会は善徳寺で毎年夏に開かれる仏教行事で、七月二十二日から二十八日に行われる。明治二十九年（一八九六）に始まった。法要期間中は蓮如の『夏の御文』の拝読・法話、二幅の蓮如絵伝の絵解き、同寺開基仏である五尊など法宝物の拝観や説明が行われる。寺内の各部屋では虫干しを兼ねて法宝物が展示・解説される。

境内では盤持甚句や踊りが行われる。盤持大会では近郷の力自慢が集まって力を競い、「蓮如太鼓」が演じられて法要を盛り上げる。期間中は多数の宿泊者があり、参詣者も多く、「お虫干し」と呼ばれて地域の人にも親しまれている。

善徳寺は蓮如によって開創されて以来一度も火災に遭っておらず、そのために多数の法宝物が残っている。

（参考文献 『城端別院 善徳寺史』 城端別院善徳寺）

34 宝物巡回 道具一式

(南砺市城端 城端別院善徳寺)

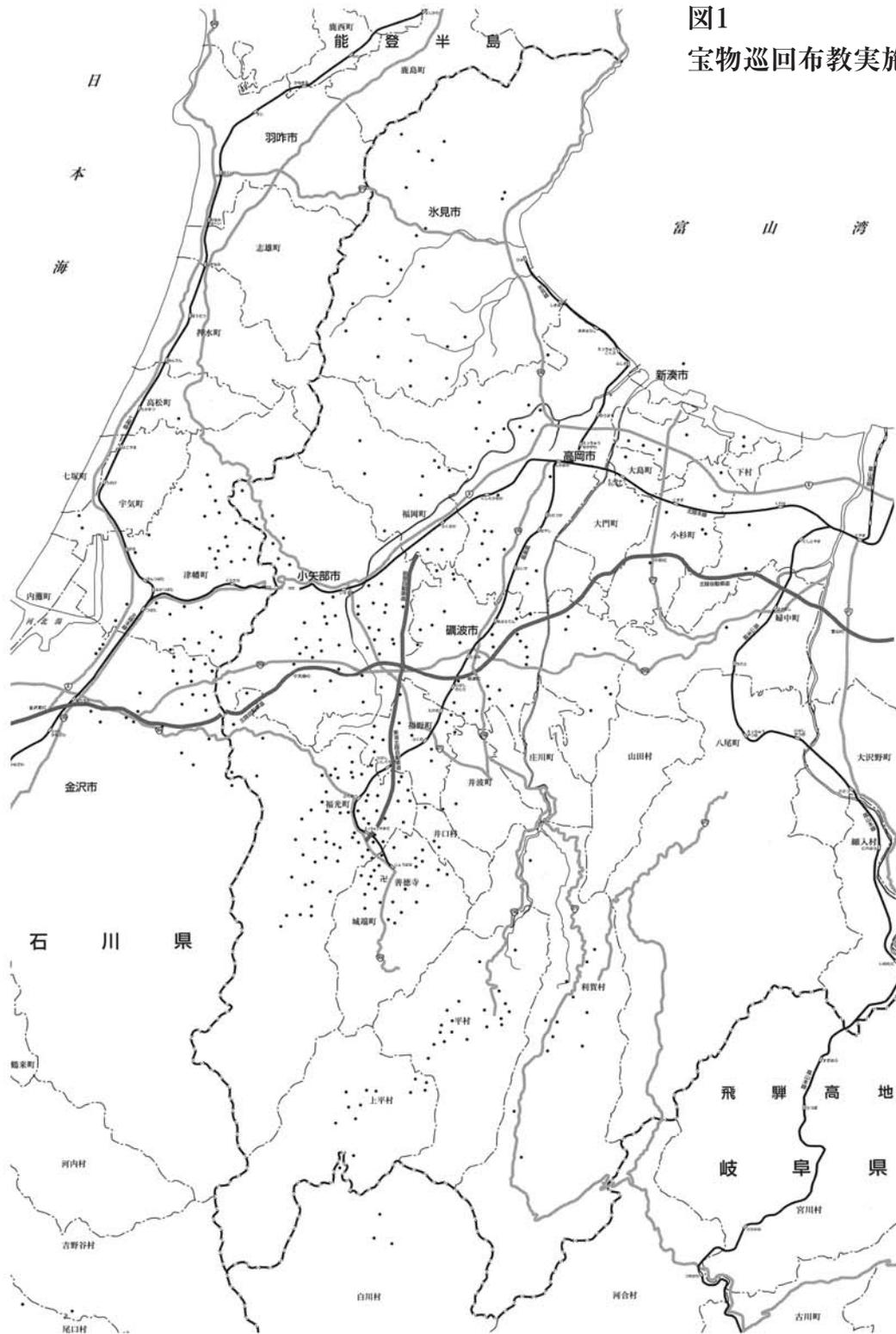
宝物巡回では以下のものを巡回する。
 巖如上人御影、ご消息、風呂敷、行李、
 ポスター、輪番の挨拶状、巡回布教
 志納金袋、諸志納帳、祠堂申込帳、万
 人講法名記、三折本尊、勤行本、荘嚴
 具(蠟燭立、香入れ、花立、仏飯具、
 香合)、粗品(軍手、手拭、お香、線香、
 チャッカマン、しゃもじ、風呂敷、石
 摺名号、合掌箸、蠟燭、マツチ)(M)



巖如上人御影



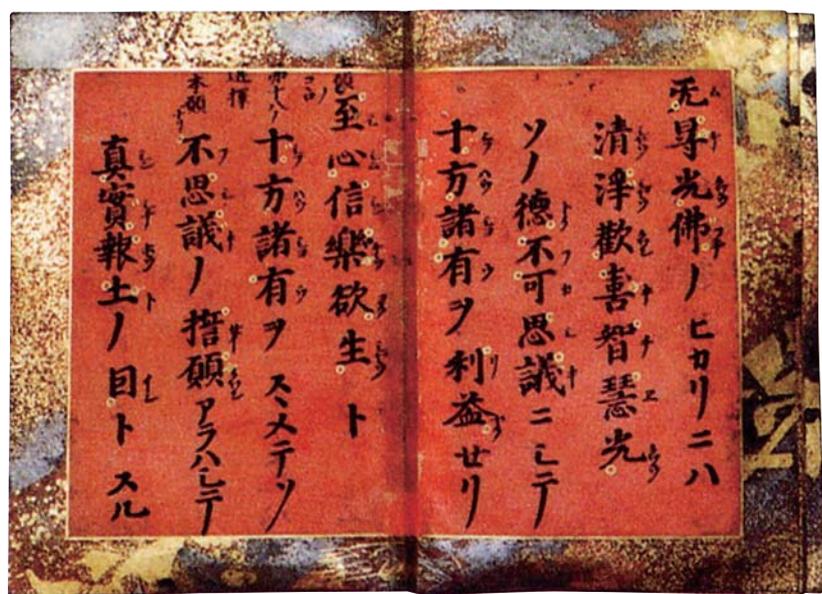
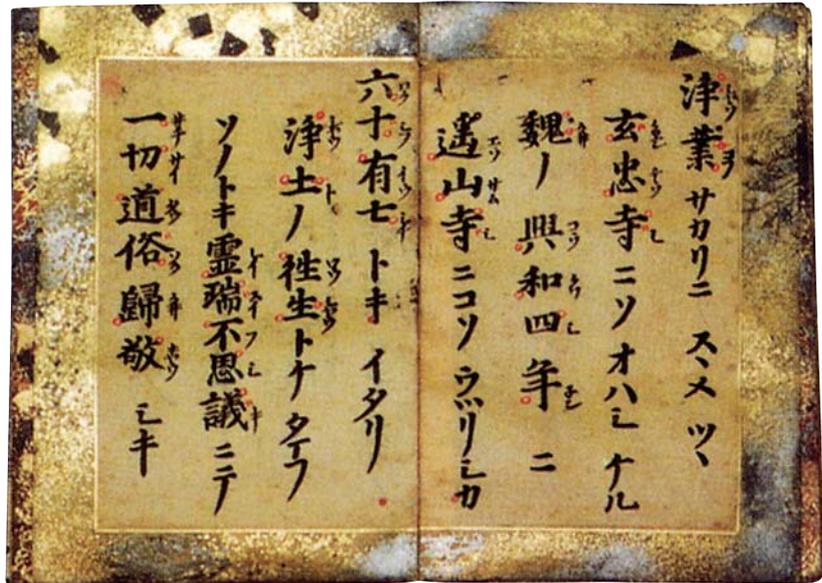
図1
宝物巡回布教実施地域図



城端別院『善徳寺史』より

宝物巡回布教実施
地域図

城端別院の巡回布教では四百か所あまりのオヤドを「ゴダイサマ(御代様)」と呼ばれる教如上人などの絵像とともに回る。「ゴダイサマ」をヤドからお送りするときは、その家の主人が縁側から軸を巡回員の首にかけて渡す。巡回員は合掌していただき、主人は合掌して見送る。そうして「ゴダイサマ」は運ばれていく。(M)



36 天文版 三帖色紙和讃

(南砺市城端 城端別院善徳寺)
 親鸞聖人が作った浄土・高僧・
 正像末の三帖和讃を、美麗な
 色紙に木版印刷してある。蓮
 如上人の十三男順興寺実従が、
 天文二十年(一五五一)文明版
 正信偈和讃の板木を改訂出版し、
 さらに翌々年に色紙に摺った
 ものである。この本は本願寺の
 法主にかぎって使われた貴重
 な品である。昭和五十八年に富
 山県指定文化財となった。(M)

三帖色紙和讃と柳宗悦

南砺市 大福寺住職 太田浩史

『三帖和讃』が初めて開版されたのは、本願寺第八代蓮如が吉崎で布教した文明五年（一四七三）三月のことであった。一般の字画字形と異なる風趣に満ちた書体は第七代存如のものといわれる。これを「文明版」と呼び、全国で数点が現存する。その後天文二十年（一五五一）第十代証如が山科本願寺において新たに改版したのが「天文版」である。この改版事業に参画して、日記『私心記』に記録を残したのが蓮如の第十三男順興寺実従（一四九八—一五六四）であった。ゆえに「天文版」は「私心版」とも呼ばれる。

ところで『私心記』天文二十二年（一五五三）十一月二十日の条に「色紙の和讃新數摺せられ候て、御堂に被置候也」とある。これが翌二十一日に始まる報恩講七昼夜に使用されたことは容易に想像できる。今日残る「天文版」の「色紙和讃」は貝塚願泉寺本と城端善徳寺本が知られているのみである。一般の白紙墨摺の本とは異なり、見開きごとに朱と黄檗きはだに染め分け、節符を施して声明作法の便宜に供えてあるのは、内陣じゅんたいで巡讃をつとめる特定の人々のために刷られたからであろう。当時善徳寺は福光にあり、住職は五代目祐勝（一五三七—一五八一）であった。彼が本願寺一家衆として重んじられていたことは、証如の『天文日記』に度々その名が現われることで知られよう。

昭和二十一年五月二十七日、柳宗悦がこの書と巡り合ったことは、民藝美論の思索が『美の法門』へと昇華するきっかけとなった。柳はその翌月京都で「文明版」の『色紙和讃』を偶然入手し、『色紙和讃』の起源が蓮如代に遡ることを知るのだが、彼が魅せられたのは自力的な美醜の意識でなく、求め続けた「他力美」の典型がそこにあったからだ。「日本に生い育った信心の大きな記念」、「和書の誇りは之で充分に語るこ
とができる」と柳は『色紙和讃』を絶賛してやまなかった。

第四章 ムラからみた真宗

砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子

ムラのお講 — 砺波市美術館のある砺波市高道集落の例 —

現在、砺波市美術館のある高道集落は、砺波平野扇状部に位置し、昭和四十年代以前は砺波地方の典型的な純農村の散居集落であった。この集落の中で、古くからどのように真宗が受け入れられてきたのか、村の「講」という視点からさぐってみたい。

まず、「講」とは、本来仏典を講説する僧衆の集会を意味した（『岩波 仏教辞典』）が、砺波地方の場合、多くは、蓮如上人が浄土真宗の布教方法として農民衆を相手に考案した対話形式の語らいの場を意味する。

高道のお講

1. 宿善会の講

戦前は「宿善会」と称して、高道の老人たちが年に数回集まり、仏教の法話を聞いたり、物故者の追悼会を開いたりしていた。戦後老人会として隣村坪内と合同の明善会ができ、宿善会は自然消滅した。しかし、高道集落内の物故者を記す宿善会の法名軸は、尼お講に引き継がれている。

2. 若衆報恩講（ワカイシヨボンコ）

高道と坪内の二十一歳から四十一歳までの若者（男）を会員とする照吾会が主体となって行う報恩講。昭和五年から毎年行われており、平成二十二年には八十回を数えた。宿をするのは、家を新築したり、嫁取りをした家など、めでたいことがあった家が多かった。昭和二十七年に公民館が新築されてからはすべて公民館でなされるようになった。農閑期の一月から二月に行う。

若衆報恩講は新嫁の披露の場であった。新嫁は高島田を結って紋付を着、やはり紋付を着た姑に付き添われておまいりするのが習慣で、村の仲間入りの儀式でもあった。

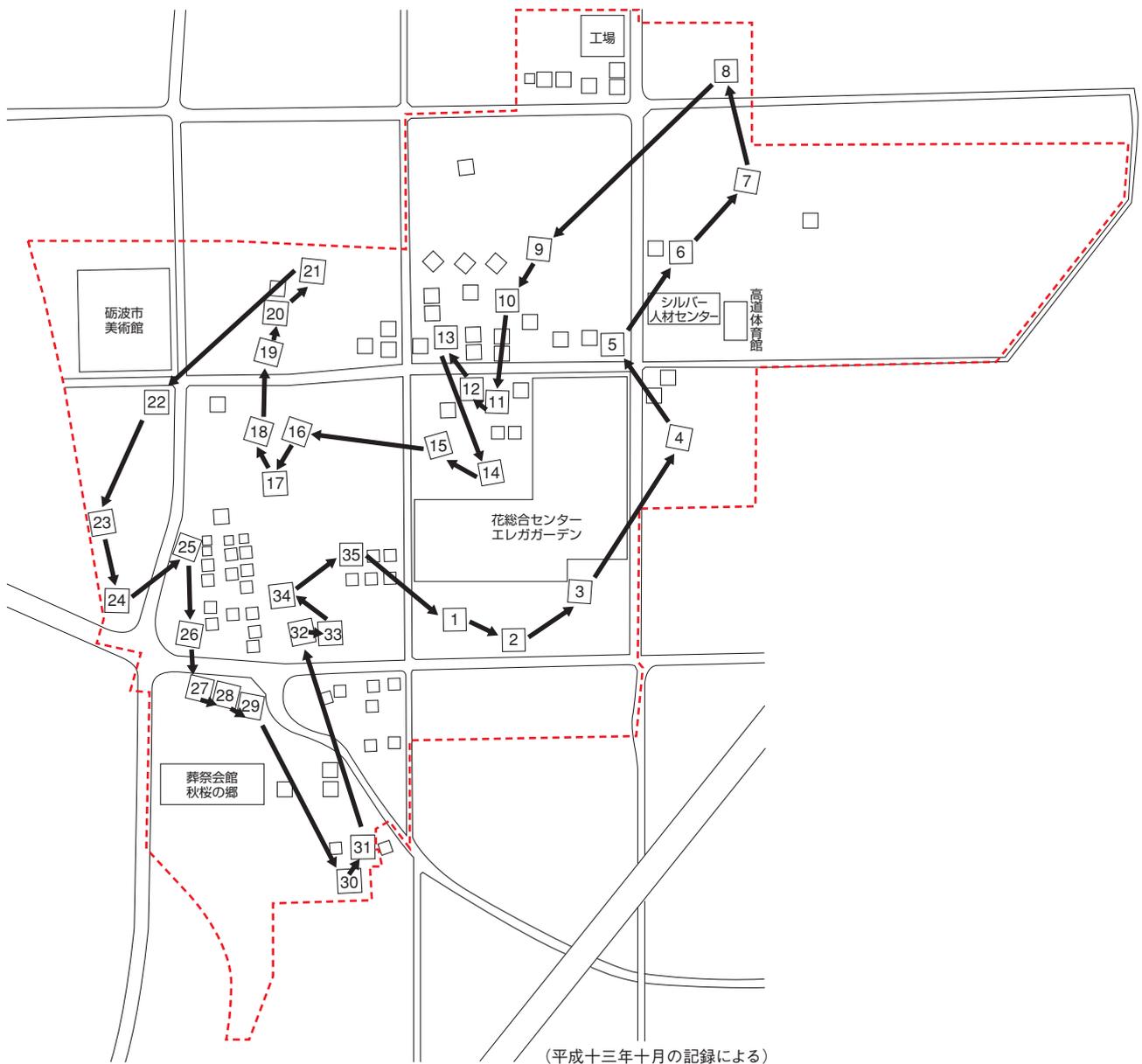
3. 尼お講

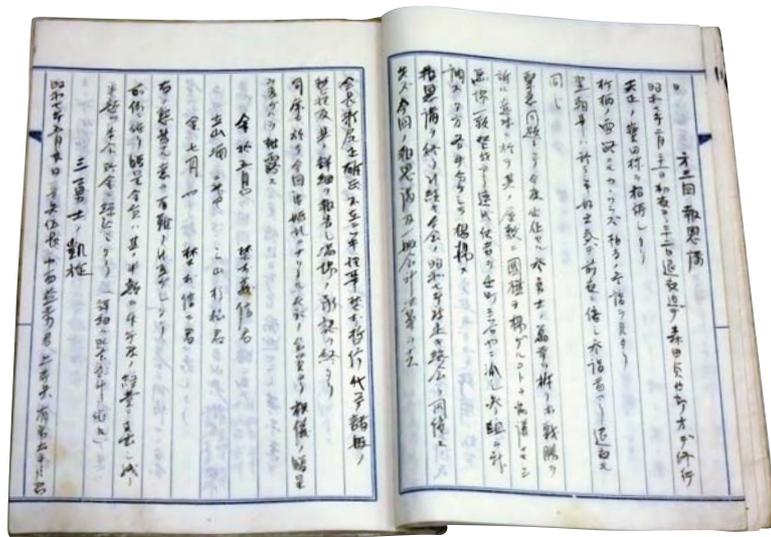
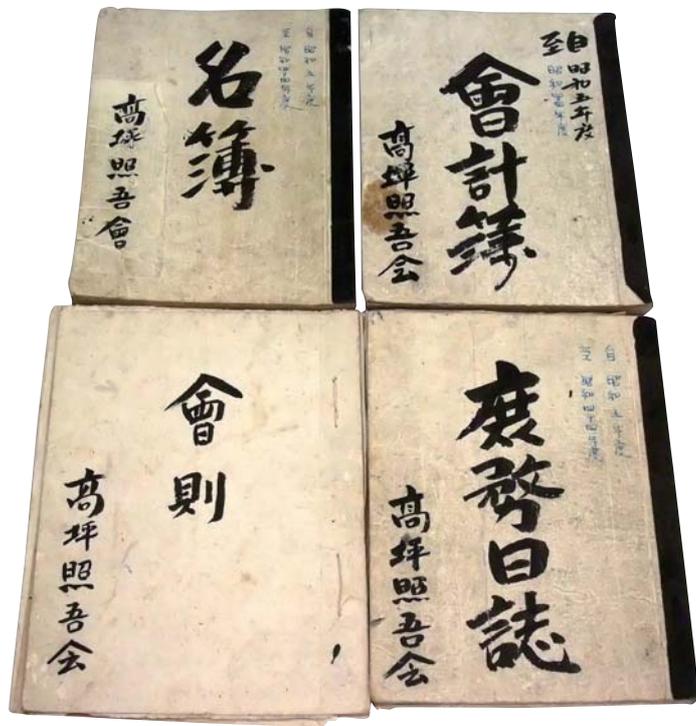
各戸一人の婦人の参加によるお講。明治四十四年に本山の東本願寺から親鸞聖人の絵像を下付されたのが始まりという。婦人方の「芋績み」という労働奉仕によって貯めたお金をお礼として納めた。平成二十二年で百年目となる。親鸞聖人（「ご開山さま」）の絵像を厨子に安置し、十日ごとに各家々をまわして預かっている（図2参照）。年に一度、尼講をもす（行う）ときは公民館へ運ばれる。

図2

高道尼お講

「ご開山さま(親鸞聖人絵像)」のまわり順



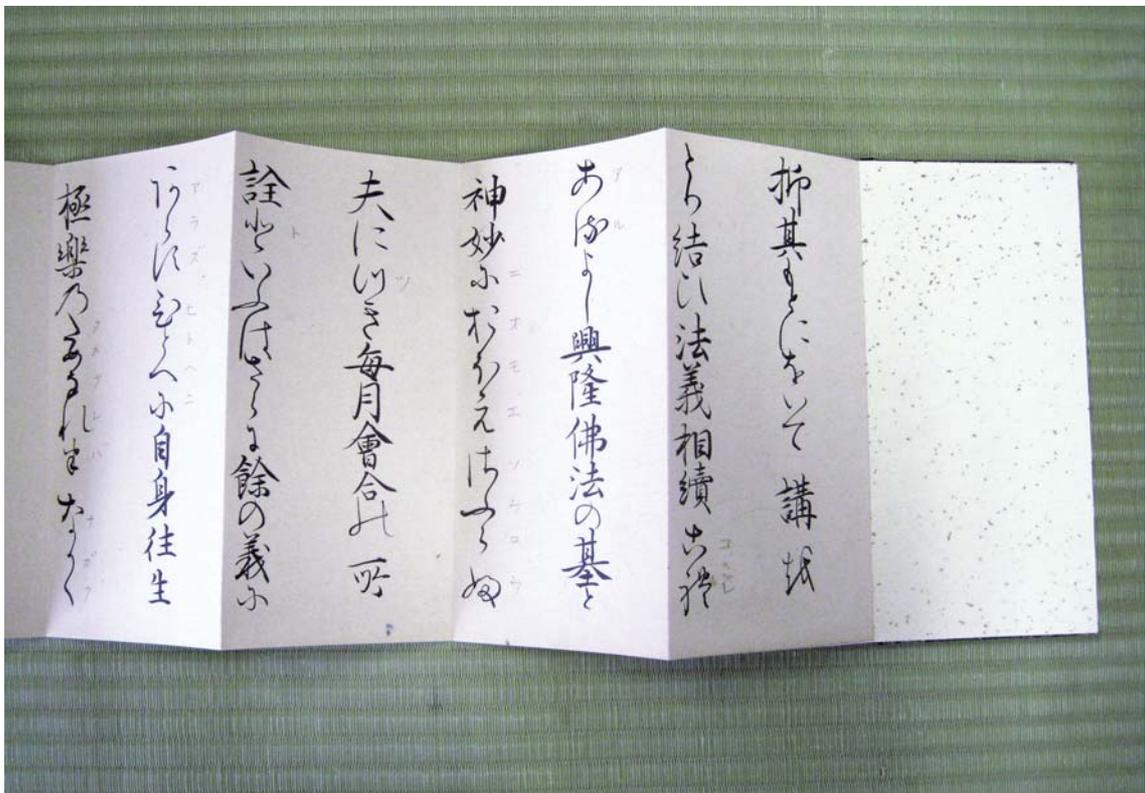


37 若衆報恩講 過去の記録帳

(砺波市高坪地区照吾会)

高道と坪内の二十一歳から四十一歳の男子を会員とする照吾会が行ってきた「若衆報恩講」の記録帳は六十四冊ある。照吾会は昭和五年に結成されており、平成二十二年の報恩講で八十回を数えた。(Y)





38

尼お講 ご消息

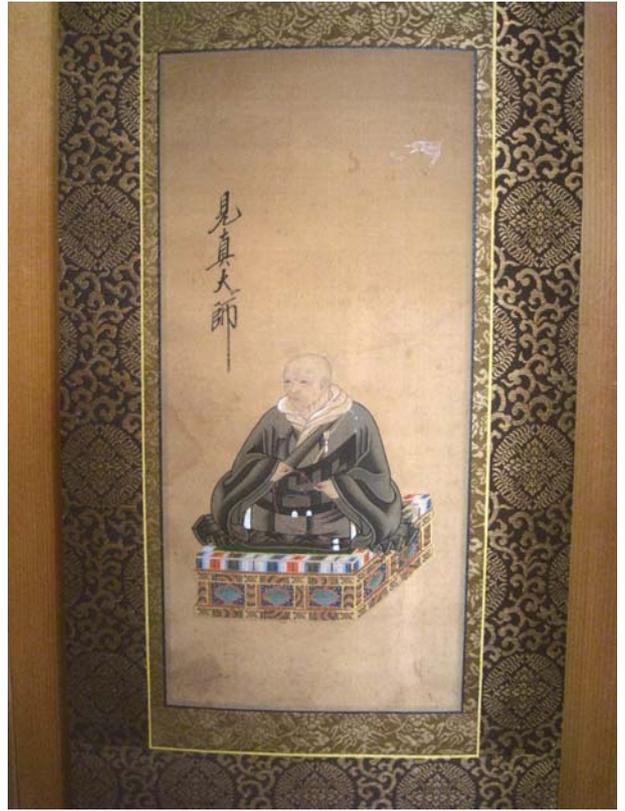
(砺波市高道地区尼講)

明治十四年八月一日に
 釈光勝(東本願寺二十一
 世嚴如)から高道村
 二十八日講中へ下付さ
 れたものである。本文中
 には読み仮名が小さく
 書かれており、お講の折
 には読み上げられてい
 たものと思われる。
 今までは巻物仕立てで
 あつたものを、平成十九
 年に折装に仕立て直さ
 れた。(Y)

「抑其もとにて、講を
 とり結び、法義相續これ
 あるよし、興隆佛法の基と
 神妙におほえそふらふ、
 夫につき、毎月会合の所
 詮といふは、さらに余の義に
 あらず、ひとへに自身往生
 極樂のためなれば、ながく
 退転なく、参集さぶらひて、
 あひたがひに信心の得否を
 沙汰し、速やかに金豪の
 信心を決定して、往生浄土の
 素懐をとぐべきものなり、
 夫当流聖人の勸化の趣は、
 他力真実の信心をもて、
 肝要とせられそふらふ、されば
 この他力の信心といふことを、
 決定せずば、真実報土には
 往生せざるものなり、其ゆへは
 まづ罪をいへば、十悪五逆
 謗法闡提とて、これに過
 たるはあるべからず、ことに
 女人の身はおとこにのみは
 まさりて、五障三従とて
 ふかき身なれば、後生には
 むなしく、无间地獄におちん
 身なれども、かたじけなくも
 阿弥陀如来ひとり、十方
 三世の諸仏の悲願に
 もれたるわれら女人を
 たすけたまふ御うれしき
 ありがたさよと、ふかくおもひ
 とりて、阿弥陀如来をたのみ
 たてまつるべきなり、それ
 他力の信心をとらんと
 おもはん輩にをいては、
 なにのやうもなく、もろもろの
 雑行雑修をさしをきて、
 いささかもおのがはからひを
 まじえず、一心一向に阿弥陀
 仏に帰命し奉る一念の信
 ままとなれば、誓願むなし
 からず、大悲の心光に摂護
 せられまいらせてながく
 生死に立かへるべき道を
 ふさぎたまふなり、此ころを
 経には横截五悪趣惡趣
 自然閉とはとかれたり、然れば
 一期の命尽ぬれば、速に
 安養の淨刹に送り給ひて、
 无上の妙果を証せしめたまふ
 なり、さてかやうに心得ての
 うへには、露ばかりも疑なく
 ひしと弥陀一仏に帰して
 此度の往生は治定なりと
 よるこび申こころの、ねても
 さめてもわすれざるを、本願
 たのむ決定信を得たる
 信心の行人とはいふなり、
 さればいよいよ弥陀如来に
 たすけられまいらす恩徳の
 ふかきことをおもひ奉りて、
 かの仏恩報尽のためには、
 行住坐臥をえらばず、常に
 称名念仏間断なくまうし
 奉るべきものなり、あなかしこ
 あなかしこ

明治十四年 釈光勝(印)
 八月一日

越中国砺波郡
 高道村廿八日講中」



39

尼お講 見真大師像と厨子

(砺波市高道地区尼講)

「見真大師」は親鸞聖人のこと。明治四十四年、東本願寺二十三世彰如の裏書がある。平成二十二年でちょうど百年になる。高道では現在もこの厨子に入れた見真大師像を十日間ごとに各家へ回している。(Y)

尼お講の思い出話

むかし、女たちは晩になるとオボケ^(※1)を持って一軒の家へ集まり、イロリのふちで苧をうみ^(※2)ながらいろんな世間話をしたものです。そんななかに、熱心な真宗信者のおばあさんがおり、みんなに呼びかけて、苧をうんだお金をためて仏様^(※3)を求めたと聞いています。今年でちょうど百年目になるはず^(※4)です。

高道はむかしから約三十軒ありますが、仏様は全部の家を廻られました。仏様が家へはいられたら、家の仏壇の横において、家の仏様と同じように、毎朝おぼくさまをお供えしてお参りします。十日間お守りしたら、次の一の日に次の家へ送り出します。

仏様はお堂(厨子)の中へ入れてあります。ご本山から仏様をいただいたとき、村の大きい家の人がお金をだしあって、大工さんに頼んでお堂を作ってくださいました。今のお堂は三代目です。むかしは今みたいに自動車がなかったで、みんな担いで運びました。道も細いし、雪が積もっていたり、泥道だったりすると、ころんだりして壊れてしまうのです。

仏様を担いで運ぶのは、たいていその家の男の子でした。むかしの子どもはかたかた^(※4)ので、嫌がりもせず、ちゃんと担いでくれました。むしろ、男の子はそれが当然の自分の仕事と思っていたものです。

昭和四十年ごろから、みんな外へ働きにでるようになり、仏様を次の家へ持っていっても、家は留守で鍵がかかっていて、玄関先におきっぱなしにすることもたびたび起こるようになりました。仏様に申し訳なく、もう各家を廻さず、公民館に置こうということになったこともありました。

それが、近年若い人の中から、「こんなことではいけない、希望する家だけでも廻そう」という声が起こり、今またほとんどの家を廻るようになりました。ありがたいことです。

(話者 高道集落 八十代のおばあちゃん)



※1 オボケ(苧桶) 麻を入れた桶

※2 苧をうむ 麻に縞りをかける作業をすること

※3 絵像の軸の裏には「明治四十四年」の年紀がある

※4 子どもがかたい 素直で、親や年寄りのいうことをよくきく子どものこと

第五章 砺波地方の説教者たち

砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子

説教者による説教は、現在では城端善徳寺だけで行われているが、かつての砺波地方の各町では、毎日必ず行われていた。そこでは、十日ごとに次々と説教者が入れ替わりに訪れていた。一日三座説教者は一つの場での説教が終わると次の町の説教場へと宿を移し、また新しい聴衆を前に説教を語った。熱心な信者は次の場へもついていて、二度でも三度でもその説教者の語る説教に耳を傾けたものだという。

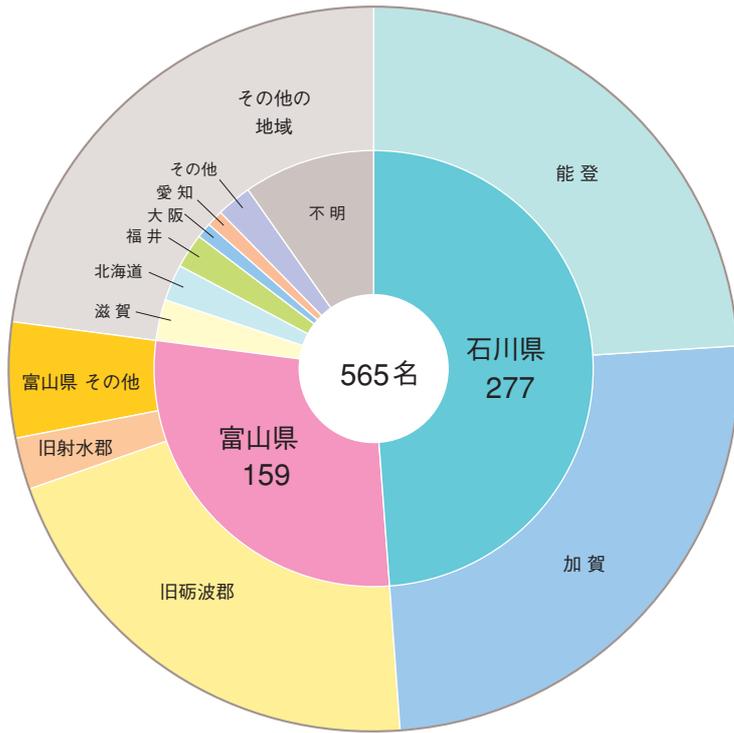
そうした説教者は地元僧侶たちだけではなかった。能登・加賀・福井などの近県をはじめ、愛知・滋賀・岐阜などからも多くの説教者が訪れた。中でも能登の上野慶宗、のりきよぶんゆう範浄文雄、福井の山本龍音などの名説教ぶりは今も古老たちの語り草になっている。彼らの語る言葉は節（抑揚）をつけた音楽性をもつ「ふしだんせつきょう節談説教」とよばれる。その独特の節回しは、「能登節」「加賀節」という地域名で呼ばれたり、大成させた個人の名を取り、亀田千巖の「亀田節」、範浄文雄の「範浄節」などとも称された。

説教者の修業の方法は「随行」と呼ばれる。若いころから師である説教者に常に付き従い、師と寝食を共にすることによって、説教はもとより、日常の立ち居ふるまいから生活規範まできびしくしつけられ、一人前の説教者として育っていったのである。

（参考文献 関山和夫「説教の歴史」岩波新書）

全国から出町 眞壽寺を訪れた
説教者の延べ人数

(昭和二十五年から四十年)



(砺波市永福町 眞壽寺蔵「約定帳」、「御芳名」、「記録帳」による)

昭和三十年頃の砺波地方の
常設説教場の分布



昭和三十年から三十五年までに出町眞壽寺を訪れた説教者たち

年	月	説教者名	県
昭三十	五月上	天井順導	石川
	七月上	香城教道	石川
	七月中	藤田良昭	富山
	十一月下	範浄文雄	石川
	七月上	上野慶宗	石川
	七月上	佐々木伸磨	石川
	七月上	長柄勝円	石川
	七月中	藤田良昭	富山
	七月下	山下正勝	奈良
	八月中	干場教昭	石川
	八月中	長尾淳澄	石川
	九月中	香城学	石川
昭三十一	九月下	梅原徹	石川
	十月上	伊藤澗	石川
	十月中	萬澤慧真	石川
	十月下	浅井真念	石川
	十一月上	畠山秀円	石川
	十一月中	平田環樹	大阪
	十一月上	寺島立峰	富山
	十一月下	碓井賢章	石川
	十二月上	寺本明現	石川
	十二月中	山本龍音	福井
	十二月二十日	大野正平	石川
	十二月二十日	川岸不退	石川
昭三十二	十二月二十日	萬沢慧真	石川
	十二月二十日	吉本寿寛	不明
	十二月二十日	経森伸昭	不明
	十二月二十日	福谷祐恵	石川
	十二月下	川岸不退	石川
	一月上	加藤明圓	石川
	一月上	永藁信昭	石川
	一月下	成田正磨	石川
	二月上	白井賢雄	石川
	二月中	上瀧順憲	富山
	二月下	梅原晚俊	富山
	三月上	山田純圓	富山
昭三十三	三月上	寺島立峰	富山
	三月中	桃井励壽	富山
	三月中	池村龍導	石川
	三月下	香城教心	石川
	三月下	藤岡賢治	北海道
	四月上	長田照顕	石川
	四月上	川岸不退	石川
	四月中	藤條正嵩	富山
	五月上	高藤琢	富山
	五月上	香塚学	石川
	五月中	美濃静江	石川
	五月中	森金法安	石川
五月下	金剛静樹	石川	
五月下	滝岡徳什	石川	
六月上	安多智玄	石川	
昭三十四	六月上	荒川徳澄	石川
	六月中	鳥越知慶	富山
	六月中	西尾常信	富山
	六月下	卜部法浄	富山
	六月下	石黒秀学	富山
	七月上	真栗專證	北海道
	七月上	上野慶宗	石川
	七月中	藤田良昭	富山
	七月下	山下正勝	奈良
	八月上	西山和順	石川
	八月上	朝倉静雄	滋賀
	八月中	橋瑞順	石川
昭三十五	四月中	長田照顕	石川
	四月中	藤條正嵩	富山
	五月上	天井順導	石川
	五月中	碓井賢章	石川
	五月中	木田弘憲	石川
	五月下	真栗專證	北海道
	五月下	出見世法観	石川
	六月上	伊藤澗	石川
	六月上	松本法順	石川
	六月中	符波諳教	石川
	六月下	平田環樹	富山
	六月下	梅原徹	石川
七月上	大橋賢正	石川	
七月上	横井圓諦	愛知	
七月下	碓井賢章	石川	
七月下	山本龍音	福井	
昭三十六	十二月下	稲澤勝憲	富山
	一月上	加藤明圓	石川
	一月上	川岸不退	石川
	一月下	西尾常信	富山
	一月下	平田環樹	富山
	二月上	白井賢雄	石川
	二月上	寺本明親	石川
	三月上	山下正勝	奈良
	三月下	石川宗應	富山
	四月上	畠山秀円	石川
	四月中	長田照顕	石川
	四月中	藤條正嵩	富山
五月上	天井順導	石川	
五月中	碓井賢章	石川	
五月中	真栗專證	北海道	
五月下	滝岡徳什	石川	
六月上	卜部法浄	富山	
六月上	成田正磨	石川	
六月中	東静哲	石川	
六月下	青木明透	大阪	
六月下	本居愛邦	滋賀	
七月上	光林義山	石川	
七月上	山田純圓	富山	
七月上	上野慶宗	石川	
七月下	藤田良昭	富山	
七月下	高森顕徹	富山	

昭三十四	七月下	寺島立峰	富山
	八月上	畠山賢心	富山
	八月上	荒川徳證	石川
	八月中	上滝利正	不明
	八月中	上瀧順憲	富山
	八月下	西尾星明	富山
	八月下	堀信誠	石川
	八月下	香城学	石川
	九月上	伊藤澗	石川
	九月中	鳥越研章	富山
	九月中	吉藤孝順	石川
	九月下	梅原徹	石川
	十月上	橋瑞順	石川
	十月中	萬澤慧真	石川
	十月中	真栗良照	富山
	十月下	経森伸昭	石川
	十一月上	安多智玄	石川
	十一月上	大橋賢正	石川
	十一月中	滝本重誓	石川
	十二月上	山本龍音	福井
	十二月上	松本法順	石川
	十二月中	美濃静江	石川
	十二月下	山本顕正	石川
	一月上	加藤明圓	石川
	一月中	高平幸真	富山
	一月中	持田文雄	石川
	一月下	細川行樹	富山
	一月下	山本龍音	福井
	二月上	白井賢雄	石川
	二月中	長柄勝円	石川
	二月中	西尾常信	富山

	二月下	梅原曉俊	富山
	三月上	石黒秀学	富山
	三月上	本居愛邦	滋賀
	三月中	藤井惠隆	石川
	三月下	吉藤孝順	石川
	四月上	石田香道	新潟
	四月上	西山和順	石川
	四月中	寺島立峰	富山
	四月下	山田純圓	富山
	五月上	高藤琢	富山
	五月上	鳥越知慶	富山
	五月中	真栗專證	北海道
	五月中	木田弘憲	石川
	五月下	土居康正	富山
	六月上	卜部法浄	富山
	六月上	上瀧順憲	富山
	六月中	大宮顕密	石川
	六月下	長谷川信成	富山
	六月下	青木明透	大阪
	六月三十日	佐々木裕證	大阪
	六月三十日	浦田秀栄	富山
	六月三十日	青木明透	大阪
	六月三十日	龍川法真	富山
	七月上	成田正磨	石川
	七月中	東静哲	石川
	七月下	碓井賢章	石川
	七月下	山下正勝	奈良
	八月上	石田香道	新潟
	八月上	橋瑞順	石川
	八月中	畠山賢心	富山
	八月下	美濃静江	石川

昭三十五

	八月下	鳥越研章	石川
	九月上	香城教	石川
	九月中	竹澤秀賢	富山
	九月中	西村曉勝	石川
	九月下	梅原徹	石川
	十月上	伊藤澗	石川
	十月上	森金法安	石川
	十月中	畠山秀円	石川
	十月中	長田照顕	石川
	十月下	松本法順	石川
	十月下	上野慶宗	石川
	十一月上	萬澤慧真	石川
	十一月上	横井圓諦	愛知
	十一月下	川岸不退	石川
	十二月上	石川宗応	富山
	十二月上	藤田良昭	富山
	十二月下	本居愛邦	滋賀
	一月上	山本顕正	石川
	一月上	加藤明円	石川
	一月下	吉藤孝順	石川
	一月下	萬澤慧真	石川
	二月下	山本龍音	福井
	二月下	若山竜俊	石川
	三月上	山田順圓	富山
	三月上	山下正勝	奈良
	四月上	滝本重誓	石川
	五月上	安多正樹	石川
	五月上	範浄文雄	石川
	五月中	寺島立峰	富山
	五月中	真栗專證	北海道
	五月下	鳥越知慶	富山

(砺波市永福町 眞壽寺蔵「約定帳」および「御芳名」による)

	五月下	齊藤琢	富山
	六月上	卜部法浄	富山
	六月上	高木元秀	滋賀
	六月中	成田正磨	石川
	六月中	川岸不退	石川
	六月下	美濃静江	石川
	六月下	西尾常信	富山
	七月上	長柄勝円	石川
	七月上	上野慶宗	石川
	七月中	木田弘憲	石川
	七月中	藤田良昭	富山
	七月下	土居康正	富山
	七月下	本居愛邦	滋賀
	八月上	土居康正	富山
	八月中	星子恵真	熊本
	八月中	長谷川信成	富山
	八月下	碓井賢章	石川
	八月下	香城学	石川
	九月上	細川行樹	富山
	九月中	国門量記	石川
	九月下	梅原徹	石川
	十月上	伊藤澗	石川
	十月上	竹澤秀賢	富山
	十月中	北山教令	石川
	十月下	道元宏忍	富山
	十一月上	大橋賢了	北海道
	十一月下	天井順導	石川
	十二月上	石川宗応	富山
	十二月下	長谷川慶順	富山

第六章 となみ散居村学習講座資料

となみ散居村ミュージアム館長 砂田龍次

田屋河原古戦場

住 所…富山県南砺市福野広安

文化財…南砺市指定史跡

指定期日…昭和五十六年十月三十日

文明十三年（一四八一）に起こったとされる越中一向一揆の主戦城跡がこの田屋河原である。
田屋河原は、富山県南砺市福野広安を流れる山田川の河川敷である。

一 概要

井波瑞泉寺の「鬪諍記」によれば、当時瑞泉寺とその近郊には、守護富樫政親の弾圧により、大勢の加賀一向宗（浄土真宗）徒が逃れてきていた。

富樫政親は、彼らの拠点となつている瑞泉寺を焼き払うよう福光城主石黒光義に要請した。

石黒光義も、一向勢力の拡大に危惧を抱いており、医王山惣海寺（天台宗）衆と共に総勢千六百の軍勢を率いて瑞泉寺討伐に向かった。

一方、瑞泉寺では、五箇山、般若野、射水郡などから援軍を得て総勢五千で、ここ山田川（田屋河原）に石黒軍を迎え撃つたのである。

この戦いの最中に、加賀湯涌谷の一向宗が惣海寺、福光城下を焼き討ちしたので、石黒軍は総崩れとなり、勝敗は決したのである。

一向宗徒は、さらに野尻城主を降伏させるなどして、砺波郡全域を勢力下に置いたと伝えられている。

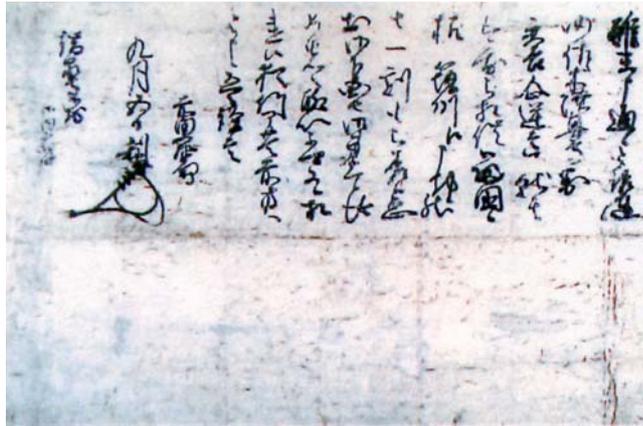
なお、安居の地にある「石黒墳墓（市指定史跡）」は、この時、安居寺（真言宗）に逃れて切腹した石黒主従十六人を葬つたものであるという。



田屋河原古戦場



山田川 合戦の舞台となった場所



天正十二年、対成政のため瑞泉寺顕秀に帰国を促す前田利家書状

越中一向一揆

一：加賀一向一揆への遠因

応仁の乱は、将軍家以下の諸守護大名と家臣団を巻き込んで、長期にわたる争乱となり、都から地方へと波及していった。

加賀では、富樫政親と弟の幸千代が、守護家の家督を巡って反目し、幸千代側が高田専修寺門徒衆等が付いたのに対して、政親の守護権の確定に貢献した。

このことが、後の加賀一向一揆への遠因の一つとなったのである。

この時、政親は門徒衆の台頭を危惧して弾圧に転じた。このため、多くの門徒衆が越中に逃れ、井波瑞泉寺を頼ったことから、政親は福光城主「石黒光義」にその討伐を依頼した。

二：砺波郡一向一揆

文明十三年（一四八一）二月、石黒や医王山の天台宗「物海寺」衆の軍勢千六百余人余が瑞泉寺に向かった。

防御の備えがない瑞泉寺側は、約四キロ程西にある山田川辺りまで出張り、同月十八日の田屋河原合戦となった。

「瑞泉寺側」については、坊主二十三人を含め、五箇山衆三百人、砺波郡衆二千人、山田谷・般若野衆千五百人、射水郡衆千人などの農民衆など合計五千人余である。

同時に、医王山北西の加賀湯涌谷の門徒衆二千人が、急遽国境を越えて、手薄になっていた惣海寺や福光城を焼き打ちした。この煙を見て石黒勢が動揺し、戦意を喪失したことで戦果が決定し、追撃により七百人余の首を取り、石黒光義主従も福野安居寺に落ち延び、最後はそこで果てた。

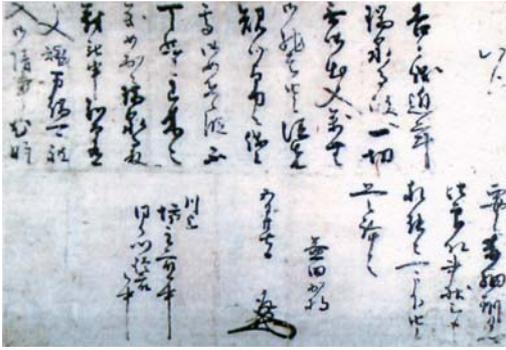
この事件は、文明十三年（一四八一）砺波郡一向一揆と呼ばれ、瑞泉寺「闘争記」に記録されている。



瑞泉寺太子堂



井波別院瑞泉寺



瑞泉寺への与力について記した益田少将書状



福光城址

(資料提供…久保尚文氏)

この事件は、瑞泉寺住職蓮乗及びその姑勝如尼しやうじよにの在世中に起こっており、長享二年(一四八八)の加賀一向一揆に先だつて、一向一揆は軍事的勝利を収めた重要な事件であった。以後、本願寺と密接不離の関係をもち北陸の歴史の大きな分岐点となる事件である。

三・一向一揆と瑞泉寺

また、この事件によって井波瑞泉寺は、砺波郡での地盤を固めると共に、その上に、蓮如血縁寺院としての力を付けていく伏木の勝興寺が生み出されたのである。

これ以降、北陸では、永正三年(一五〇六)に加賀一向一揆が蜂起して、砺波郡守護代遊佐氏を追い払うことで、越中真宗教団が成長していくのである。

この時期の瑞泉寺が、どのような役割を果たしていたか詳細は分からないが、赤尾の道宗と関係していたことなどから、越中五箇山との関係は深かったと思われる。

砺波郡一帯での瑞泉寺の影響力が大きかったことは疑いない事実である。

大永元年(一五二一)、越後守護代長尾為景が加賀一向一揆の討伐にあたつたが、大永三年(一五二四)三月までに和睦した。以来、ほぼ半世紀近くにわたり、砺波郡一揆方は、本願寺門主、勝興寺、瑞泉寺の指揮下で争う事が起きないように務めた。

しかし、永禄十二年(一五六九)初冬、増山城こじまもと小島職鎮としぢの勝興寺方攻撃により抗争が再燃した。続いて、翌年までの間に越中では、一向一揆が蜂起した。

瑞泉寺をめぐる戦乱の終決、そして越中の一向一揆の終焉は、天正十三年(一五八五)豊臣秀吉の佐々成政制圧を待たねばならなかった。

経過報告

砺波市美術館学芸員 末永忠宏

砺波の真宗風土展ワーキング・グループは平成二十一(二〇〇九)年八月十四日に尾田武雄砺波市文化財保護審議委員、小西竹文砺波市美術館長、安カ川恵子砺波郷土資料館学芸員、そして末永の四名によって立ち上げられた。

まず小西館長より展示概要が説明され次の事柄が確認された。「①砺波地方の暮らしの中で、浄土真宗の影響は無視できない。庶民の生活文化の視点から、真宗の風土について企画展示する ②砺波地方の「講」(コミュニティ)の中で輝いていた明治時代の若者たちにスポットをあてる ③砺波地方の寺院や講から輩出した妙好人(信仰心の篤い在家念仏信者)たちの果たした役割について考察する ④砺波地方の真宗の民俗(生活行事など)を紹介する」の四項目。これらのトピックから展覧会にすることが目指された。実働部隊はこのワーキング・グループが担当し、展覧会の運営は実行委員会形式で行うことが決まった。そして生活文化を含んだ大きなテーマであるため、砺波郷土資料館(昭和五十八年開館)、となみ散居村ミュージアム(平成十八年開館)、当館(平成九年開館)との共同企画展として行うこととした。以後、月一回のペースでワーキングを行うこととした。

九月八日はフリートークキング、委員よりこの企画に寄せる熱い思いを伺った。

十月七日には安カ川さんのレクチャーを実施。

十月二十七日、小西館長、安カ川学芸員、末永で新明調査に伺う。聞願寺住職埴山法山氏、平成元年二月十九日に太子講宿をなさった飯田和夫氏、新明の神社について川田哲朗氏に話を伺った。

十一月十八日には尾田武雄氏の「となみ詰所と妙好人」と題するレクチャーを実施。

十二月十五日、いよいよ展示について打ち合わせる。ここでも様々な意見が出る。この熱気で忘年会へと向かった。年が明けて一月二十四日、美術館の側の高坪地区で若衆報恩講が開かれた。カメラを持って取材に伺う。在所の若者らによって営まれてきた行事に感慨深いものを感じた。一月二十八日。展示内容について再度協議する。

二月、瑞泉寺の藤田誓壽輪番に挨拶。展覧会の概要説明。実行委員就任のお願い。善徳寺輪番 鶴松瑩輪番に挨拶。

展覧会の概要説明。実行委員就任のお願い。南砺市教育委員会山森伸正氏に展覧会概要説明と実行委員就任のお願い。砺波市大窪の常福寺・高島静心住職に挨拶。展示概要の説明をする。

二月二十日、高坪公民館で坪内尼お講が催される。安カ川さんと末永取材。二十八日には同じ場所で高道の尼お講が催され、こちらもワーキング・グループで取材した。聞願寺の埴山住職の法話を聞く。

三月、飯田敏雄砺波市文化協会長に挨拶。実行委員会について打合せ。十八日、第一回の実行委員会を美術館で行う。チューリップフェア期間中の四月二十八日には展示の方向性について確認を行った。

五月二十五日、郷土資料館のスタッフ渡辺さんが参加して五人でワーキングを実施。

六月十六日、常福寺へ作品借用依頼。また福光美術館で「瑞泉寺の至宝」展が開催されており皆が見学する。図録の目次について検討が始まる。

七月二十一日、第二回実行委員会を開く。出品作品について協議。ここでの議論をもとに再度点検することになった。出品作品の骨子がここでまとまった。また、重文公開許可申請の手続きを開始する。

八月に図録執筆者に原稿執筆の依頼状を発送。今年の夏はお盆が過ぎても猛暑日が続いた異常気象であり、温湿度にいつも以上に気を配ったことはいまでもない。

九月二十二日。図録と展示について再確認。郷土資料館の展示は一月早く、ポスターの校正を皆でチェック。美術館では四つの催しを行うこととした。同時に借用の手続きも進んでおり、徐々にではあるが展示の具体像が見えて来つつある。展示の概要が現れてくる瞬間に立ち会う日々は、生きていると心から実感できる。この度の展覧会にご協力いただいた多くの方々に感謝申しあげたい。

庶民からみた砺波の真宗風土

砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄

真宗と石仏

砺波地方では庶民信仰のあかしである石仏の悉皆調査が昭和五十五年ごろから行われ、その全容が明らかになってきた。砺波市には千三百五十七体、南砺市千四百四十体（一部未調査）、小矢部市千七百八十八体の報告がある。これらの多くは道端にある石仏であり、富山県内はもちろん全国的に見てもその造立は多いといえる。その特徴は、地藏の造立が多いことである。幕末・明治期にかけて爆発的に造立され、石材は主に庄川町金屋から採掘される青色凝灰岩いわゆる金屋石の一つである。石仏の管理者が周知され、地藏祭が継続され、収穫祭のような雰囲気がある。路傍の石仏でありながら、ほとんどがお堂に入っている。井波町瑞泉寺太子堂に安置される聖徳太子二歳像の模刻石仏が展開している。弥陀一仏の真宗王国の地でありながら石仏の種類が多く、石動山定着修験による珍しい不動明王・飯綱権現・恵比寿・水天・青面金剛などもある。名号塔が多く、大岩日石寺磨崖仏の模刻石仏も多い。

真宗では「おおよそ造像・起塔は、弥陀の本願にあらざる所行なり」（覚如著『改邪鈔』）、また「他流には『名号より絵像、えぞうより木像』というなり、当流には『木像より絵像、えぞうより名号』というなり」（蓮如上人御一代記聞書）との教えがある。真宗地帯の民俗は民族固有の習俗や信仰を破壊する反民俗性が強いとされ、また弥陀一仏の教えは、民間信仰や庶民信仰を否定し拒んできたといわれる。だが真宗王国のこの砺波の地に、多くの石仏の造像は不自然で稀なことなのであろうか。

砺波平野は、江戸時代には百万石の加賀藩に属していた。庄川扇状地に散居村が展開し、幕末期には二十五万石を産する藩の重要な穀倉地であった。幕末期に石仏が多く建てられた背景には、庶民の経済的な豊かさも重要な要素であるが、真宗に根差した信仰心の篤さも排除できない。教団の教えと庶民の心情が交差するところに、石仏が存在している。

聖徳太子南無仏

真宗が最も輝いて見えるのは、一向一揆の時代の中世である。事実文明十三年（一四八一）の田屋河原の合戦には瑞泉寺を中心とした一向一揆と、福光の石黒氏などの戦いであるが、「闘諍記」（『井波誌』）によると「当寺に馳集ま

る者には、五ヶ山勢三百余人、近在百姓二千余人、山田谷又はハンヤ野郷之百姓千五百」がクマデ、棒、鎌を持って参戦したとある。

その後江戸時代の真宗門徒の動きは顕著にうかがい知れないが、明治十二年（一八八五）に瑞泉寺の本堂・太子堂が焼失し、その再建に向けた動きは際立っている。明治十八年には本堂の再建を成し遂げるが、瑞泉寺のシンボルである太子堂の再建は本堂建設の負債等々でままならなかった。農閑期での太子像や絵伝の巡回が行われるのが、明治二十年代からであり、各地で熱狂的に迎え入れられた。巡回を受け入れた家々は、誇りでありステータスであり、砺波の民家が大きくなったのもこれが一因となっていると思われる。砺波市に「南無阿弥陀佛」と彫られた力士の石碑が六十三基もあり、草相撲が盛んであったことを物語っている。瑞泉寺太子堂再建を目的にした興行も行われ、若い青年層へ深く浸透していた。巡回と期を同じくして、道端には太子堂が建造され、太子南無仏が安置されるようになるが、それは若衆報恩講やお講で学んだ青年層によるものであり、現在砺波地方とその周辺に二百四十六体を確認している。

両堂再建

東本願寺は、天明八年（一七八八）、文政六年（一八二二）、安政五年（一八五八）、それに元治元年（一八六四）蛤御門の変による大火で両堂が焼失し、百年未滿に四度も両堂を失っているのである。明治十二年に再建の発示が出され、全国にご消息が発せられ、いち早く毛綱が納められた。女性の黒髪で編んだ毛綱は、全国から五十三筋寄付され、富山県内からは最も多い十六筋も寄進されている（「再建の軌跡」『同朋新聞』二〇〇二年一月号）。また明治十五年には上刀利白山社から、櫻の巨木が再建のため献木されている。再建工事の人足小屋として詰所が整えられ、明治二十二年（一八八九）の詰所一覧（河村能夫著『京都の門前町と地域自立』）によると、全国の詰所は四十六軒あり、そのうち富山県内の門徒による詰所は五か所が見え、精力的に参加したことがわかる。砺波詰所の明治の妙好人砺波庄太郎は諸国詰所のリーダーである触頭ふれがしらとなっている。

ところで私は、県内の石仏研究を主にして庶民信仰に関心を持っているが、石仏は主に幕末から明治期に造立されることが多い。また造像したのが村の若連中つまり青年達のもが多く、石仏の銘文に「村若連中建之」とあることわかる。地蔵祭りも昔は子供たちが中心であったが、最近は少子化などで細々と行なわれているが、明治期は違っていたのである。地域の若者によって建てられた石仏は、地域で長く大事に維持管理され、若者や子供たちによって祭りもさされてきた。若衆報恩講などもこの時期に盛り上がったものである。まさに明治時代は若い庶民がいきいきとしていたのである。獅子舞や草相撲、ばんもち、盆踊りなどの活力となっていて、そのエネルギーが砺波の真宗風土を支えている。

ムラの信仰と家の信仰

砺波郷土資料館学芸員 安カ川恵子

ムラの信仰

砺波地方のムラには、たいてい年に一度は井波別院瑞泉寺の太子像や城端別院善徳寺の法宝物・ゴダイサマ（御代様）と呼ばれる本願寺歴代上人御影などが巡回されたり、個人の説教者なども訪れた。そして、ムラの個人の家を「宿」として「お座（法座）」が開かれた。

ムラの中でそれらの世話をしたのは「同行」といわれる人であった。井波瑞泉寺や城端善徳寺、伏木勝興寺など、巡回するそれぞれの寺院や僧侶、説教者と連絡を取り合い、日時を決め、村の中で宿を引き受けてくれる家を頼むなど、村の仏事全般についての世話をしたものである。

宿をする家は、特別大きな家というわけではなく、信心深い家柄の家がえらばれた。狭い家でも、仏間・座敷・広間などの帯戸や襖をとりはらって開放して座をしつらえた。このようなお座が開かれるのは、農繁期を避けて冬場の一〜三月に多かった。しかも一泊二日で、最初の夜は「お初夜」、翌日の午前は「お日中」、午後は「お速夜」の三座が通例であった。したがって宿の家は、暖房の準備から、障子や襖の張り替え、説教者の泊まりの用意、食事・風呂・布団の準備まで、その負担は大変なものであった。それでも、宿となった家は「報恩」という気持ちのもとで喜んでお世話をしたものである。

また、村人も村の中でお座があると、弁当を持参して宿の家へ出かけ、熱心に耳を傾け、一日中法話の世界にひたった。楽しみの少ない農村生活の中で、お座は盆や正月、祭りなどと同じような大事な「ハレ」の機会であった。

その際、訪れる説教者はお東（大谷派）であろうが、お西（本願寺派）であろうが関係なかった。ムラの門徒は、外から訪れる説教者をおおらかに受け入れ、法座を開き、真宗の教えを聞いてきたのである。『真宗民俗の再発見』を著述した蒲池勢至は「ムラ全体が一つの「講」になって仏法を聞いてきたのであり、個人の家はヤドとなって部屋を開放し多くの人が参詣する「道場」となったのではないか。」と述べている。

家の信仰

各家には座敷に大きな仏壇がある。毎朝炊きたてのご飯をよそったオボクサマをお供えして、お参りする。たいていはその家の年寄りか主人が仏壇の前にすわって正信偈しょうしんげを読む。子どもたちはその後ろに正座してすわり、お経がすむのをじっと待つ。家族そろってのお参りのあと、初めて朝ごはんの御膳についたものである。

また、よそからもらい物をするとき必ず仏壇にお供えしてからみんなに分けて食べた。親戚のお祭りや法事で出された果物やお菓子などは、親が持って帰ると、まず仏壇にお供えしてから子どもたちに分けた。

また、畑で採れたスイカやキュウリなどの野菜ものも、初成りは必ずお供えした。

子どもに対する年寄りのことばの中に「人が見とらんおても悪いことするもんでないぞ。だれも見とらんおても必ずなんなさま（仏様）が見とらっしゃるから」といわれたものだ。

子どもが家の中で遊ぶ時は、主に茶の間とせいせい広間であった。座敷の、とりわけ仏壇の前では決して大騒ぎしない。「のらいさま（如来様）の前でおごられん（騒いではいけない）」といわれたものである。

遠くへ出かける前には、必ず仏壇の前にすわり、道中の無事と留守中の無事を祈る。そして帰宅するとまた、仏壇に参って旅の無事と留守中の無事を感謝した。

娘が嫁ぐ日の朝、花嫁は白無垢に身を包み、仏壇の前で手を合わせてから家を出る。嫁ぎ先へ着くと、今度は嫁ぎ先の仏壇に、姑の先導でお参りする。

家の仏壇は家を守る大事な存在であり、家族一人一人の心のよりどころでもあった。

出品目録

No. 指定種別 作品名 作者名 員数 形状 寸法 (cm) 時代・年代 所蔵先 掲載頁

第一章 砺波の真宗について

・砺波の真宗

◎ 重要文化財
○ 富山県指定文化財

1	親鸞聖人御影	—	一幅	絵画軸装	縦九二×横四七	延宝三年(一六七五)	砺波市・浄光寺蔵	12
2	型染 仏説阿弥陀経	芹沢銈介	一帖	漆型染折本	縦三〇・四×横三五〇・二	昭和時代	高岡市・善興寺蔵	13
3	蓮如上人御影	—	一幅	絵画軸装	縦九九・五×横四二	嘉永三年(一八五〇)	砺波市・浄光寺蔵	14
4	蓮如上人名号	蓮如	一幅	墨書軸装	縦九三×横三五・五	室町時代	砺波市・浄光寺蔵	15
5	一如上人からのご消息	一如	一卷	墨書卷子	縦一七・五×横一七四・五	江戸時代	砺波市・浄光寺蔵	16
6	二河白道図	—	一幅	絵画軸装	縦一〇八×横五八	大正時代	砺波市・常福寺蔵	17
・胎動する庶民 — 幕末から明治								
7	十一面観音石仏	森川栄次郎	一点	写真	—	明治十八年(一八八五)	砺波市秋元	18
8	砺波市内の力士碑	—	三点	写真	—	文政四・明治二・明治九年	砺波市内(荒高屋・石丸・矢木)	19
・東本願寺両堂再建とお講								
9	相統講の帳面	—	一冊	冊子	縦二三・五×横一六	明治時代	砺波市・石野忠夫氏蔵	20
本山講のご消息								
10	毛綱	—	一点	写真	—	明治十二・十五年(一八七九―一八八三)	京都市・東本願寺蔵	21
11	御本山志納箱	—	一箱	箱	縦一三×横二三×高一〇〇	明治十四年(一八八二)	砺波市・開願寺蔵	21
12	本願御相統志納箱	—	一箱	箱	縦六×横七×高一三・五	明治時代	砺波市・清原勝利氏蔵	21
・妙好人砺波庄太郎ととらみ詰所								
13	砺波庄太郎(肖像画)	中尾玉僊	一幅	絵画額装	縦五〇・五×横三五・五	明治時代	砺波市・坂東宏一氏蔵	22
14	砺波庄太郎(肖像写真)	—	一点	写真額装	縦二五×横二〇	明治時代	砺波市・坂東宏一氏蔵	22
15	砺波庄太郎法名軸	—	一幅	墨書軸装	縦九九×横三九・五	明治時代	砺波市・坂東宏一氏蔵	23
16	砺波庄太郎肩衣	—	一領	肩衣	縦八〇×横八二	明治時代	砺波市・坂東宏一氏蔵	23
17	砺波庄太郎財布	—	一個	財布	縦二二・五×横一七・五	明治時代	砺波市・坂東宏一氏蔵	23
18	とらみ詰所	—	三点	写真	—	平成十九年(二〇〇七)	富山市・風間耕司氏撮影	24 25
・砺波の真宗								
19	世情慨嘆木版画	岩城信嘉	一点	木版額(十九枚連作の内)	縦二五×横三四	平成二十年(二〇〇八)	南砺市・岩城阿喜子氏蔵	26
20	石つき歌	—	一冊	冊子	縦二四×横一八	天明四年(一七八四)	砺波市・斎藤嶺雄氏蔵	27
21	石摺の名号	—	一本	石に刻字	縦二一・五×横八・五	—	砺波市・開願寺蔵	28

22	血染めの名号	—	一幅	墨書軸装	縦九七×横三六	天正年間（一五七三—一五九一）	南砺市・漆谷念仏道場蔵	29
23	地獄絵図	—	二幅（二題）	絵画軸装	縦一五五×横六九	大正時代	砺波市・常福寺蔵	30 31
24	◎ 木造阿弥陀如来立像	伝湛慶	一軀	仏像	高一二〇〇×幅四七〇	鎌倉時代	砺波市・常福寺蔵	32

第二章 井波別院瑞泉寺

・井波別院瑞泉寺再建と太子堂建設								
25	半鐘	—	一口	写真	—	明治十八年（一八八五）	南砺市・井波別院瑞泉寺蔵	36
26	太子堂建設当時の写真	—	二点	写真	—	大正時代	—	37
・明治の太子信仰—太子巡回と石仏								
27	太子巡回道具一式	—	一式	厨子他諸道具	—	明治時代	南砺市・井波別院瑞泉寺蔵	38
28	聖徳太子南無仏（石造）	—	一軀	仏像	高五八×幅二一	明治時代	砺波市・狐島地区会蔵	39
29	聖徳太子南無仏分布図	—	一点	地図	—	平成元年（一九八九）	砺波市・聞願寺蔵	40 41
30	聖徳太子巡回お講	—	一式	映像	—	—	—	87
31	聖徳太子南無仏（石造）	—	一軀	写真	—	明治時代	砺波市・五郎丸地区蔵	42
32	聖徳太子孝養像（木造）	—	一軀	仏像	高八〇×幅三五	室町時代	砺波市・景完教寺蔵	43
33	聖徳太子絵伝	—	八幅	絵画軸装	縦一九五×幅九二	昭和五年（一九三〇）	南砺市・井波別院瑞泉寺蔵	44 47

第三章 城端別院善徳寺

・宝物巡回と巡回布教								
34	宝物巡回道具一式	—	一式	行李他諸道具	—	明治時代	南砺市・城端別院善徳寺蔵	52
35	宝物巡回布教実施地域図	—	一点	地図	—	—	—	53
・善徳寺の文化財								
36	◎ 天文版三帖色紙和讃	—	三冊	冊子	縦二一×横一四	文明二十二年（一五五三）	南砺市・城端別院善徳寺蔵	54

第四章 ムラからみた真宗

・若衆報恩講—砺波市高坪地区照吾会								
37	若衆報恩講過去の記録帳	—	五冊	冊子	縦二三・五×横一七	昭和時代	砺波市・高坪地区照吾会蔵	58
・尼お講—砺波市高道地区尼講								
38	尼お講ご消息	巖如	一帖	墨書折本	縦一九×横四一四	明治十四年（一八八一）	砺波市・高道地区尼講蔵	59
39	尼お講厨子	—	一基	厨子	高二〇・五×幅九〇	昭和時代	砺波市・高道地区尼講蔵	60

聖徳太子南無仏一覽

砺波市文化財保護審議委員 尾田武雄

No.	所在地	堂	材質	年代	祭日	高さ	幅	銘文・備考
1	砺波市中央町	木	木造	明治	十月二十二日	三五	一一	銘文は無い。伝承によると大正初年以前には新町丁字路にあった。
2	砺波市本町	木	金屋石	明治	十月二日	三五	一五	銘文は無い。伝承によると、西町には子供歌舞伎の曳き山があり、男子で無いと歌舞伎役者にならないので、男の子が生まれるように祈ったとされる。
3	砺波市太郎丸	木	越前石	大正		三四	一四	銘文は無い。
4	砺波市太郎丸	木	金屋石	明治	六月三日	四五	一六	銘文は無い。
5	砺波市東幸町	木	金屋石	明治		三六	一五	銘文は無い。
6	砺波市鷹栖出墓地	コ	越前石	昭和	十一月三日	四五	一三	お堂の右側の銘文に「昭和四年七月建之 宮下ツイ」とある。
7	砺波市鷹栖出	木	金屋石	明治	二月二十二日	七〇	二五	銘文は無い。
8	砺波市鷹栖出	木	金屋石	明治		七六	三一	銘文は無い。
9	砺波市神島	木	木造	明治		三四	一四	銘文は無い。
10	砺波市大門正行寺北	木	金屋石	明治	六月二十四日	六〇	二三	銘文は無い。境一男家寄進。
11	砺波市高道	木	越前石	昭和	七月二十四日	五五	一八	銘文は無い。棟札がある銘に「矢木聖徳太子様 旧役場前ヨリ出村助次郎太宅南ニ御移転 只今ノ場所ニ安置元ノ安置ノ事村方ニモ根尾宗四郎様ニモ不明デアル 明治始メ思フ不明ニ付思付書キタル事 移転期日ノ昭和三十五年四月二十八日午後三時遠着 且シ此ノ日出町真光寺等ニ運如上人四百五十回忌執行先ニ太子様御移転祝儀上リ獅子餅マクスルニ其レヨリ出町ニ行キタルコト 其後明治二十六年ヨリ四月十六日ヲ祭礼と定今日至リ真光寺・専念寺一年事ニ御経ヲ上ゲル 太子様塗替修繕 昭和
12	砺波市中野三区	コ	金屋石	明治		四八	一六	三十二年三月十六日お帰り 修繕人 山崎支正」 銘文は無い。伝承によると明治三十二年四月、畑平右衛門さんの次男である仁太郎さんが川狩で死亡されたので、供養のために建立した。「中野郷土史資料第七号」によると「聖徳太子建立 水上宗一郎前 参考藤井半次郎談、私の実家は畑平右衛門であるが、私どもの実父平右衛門が水上宗一郎さん前に太子堂の建立を計画、金屋の名工栄次郎に依頼し明治三十二年四月に経費用五十円也を以って太子堂を建立した。」現在の太子堂は昭和五十八年にコンクリートのお堂になった。
13	砺波市中野五区	木	金屋石	明治		五六	二〇	銘文は無い。目にガラスが入っている。伝承によると明治二十八年に藤井善四郎さんが四十二歳の祝いで建てた。
14	砺波市新明	木	金屋石	明治	六月二十二日	四七	一七	銘文は無い。
15	砺波市五郎丸	木	金屋石	明治		五〇	一七	銘文は無い。目にガラスが入っている。伝承によると大島源助さんの二代目の方が十九歳で亡くなったのでその供養のために建立。
16	砺波市五郎丸	木	金屋石	明治		六四	二四	銘文は無い。伝承によると土山勝治さんの父親が、井波の太子伝に参詣されたおりに購入され。本人が背負ってこられたという。
17	砺波市荒高屋	木	金屋石	明治		四四	二二	銘文は無い。
18	砺波市荒高屋墓地	木	金屋石	明治		三六	一四	銘文は無い。元は小幡理平宅東南の角にあった。圃場整備の際にここに移動する。小幡理平さんの先祖の子供の供養に建立された。

30	砺波市鷹栖十五区	木	凝灰岩	江戸末	十一月三日	一一〇	五五	浮き彫りである。銘文は正面に「南無仏」裏面に「安政二乙卯年 津沢屋神嶋屋 釋顯現 吉右エ門様」とある。
29	砺波市鷹栖十三区	コ	凝灰岩	昭和	十月二十二日	五五	一一	銘文は無い。伝承によると「昭和五年四月二十一日東京市電は総ストになり市民の困惑に際し、進んで公共に奉仕し市民の為に東京都神田区青年団がストを回避するために運転に協力した。その際に幸次郎さんの息子健次さんが、事故に遭って死亡した。神田区青年団葬と鷹栖村葬を受け、幸次郎さんがその供養の為に、井波より購入した。
28	砺波市鷹栖十二区	コ	凝灰岩	大正	九月十八日	四〇	一一〇	銘文は無い。
27	砺波市鷹栖十二区	コ	金屋石	明治	十一月三日	三四	一一	銘文は無い。
26	砺波市鷹栖十区	コ	凝灰岩	大正	十月二十二日	三八	一五	銘文は無い。
25	砺波市鷹栖八区	コ	金屋石	大正	十月二十二日	四五	一五	銘文は無い。伝承によると、中島外次郎さん宅の子供さんが、大正の頃亡くなりその供養のために建立した。
24	砺波市鷹栖三区	コ	凝灰岩	大正	十月二十三日	四六	一四	銘文は無い。
23	砺波市鷹栖三区	コ	凝灰岩	大正	十月二十三日	二五	一一	銘文が台座に「寺本奥」とある。
22	砺波市野村島中之島	木	木造	明治	七月二十七日	四四	一一	銘文は無い。伝承によると明治二十八年に建立されたという。草相撲の力士河合榮太郎を偲んで建立。文書が残されている。お堂が立派である。
21	砺波市苗加浦之島墓地	コ	金屋石	明治		三二	一七	銘文は無い。伝承によると、明治中期に小倉与次郎さんの幼少期、重い病気に罹り親がその平癒を願って建立した。そのために病氣は治った。
20	砺波市苗加浦之島	木	金屋石	明治	八月十五日	三二	一一	銘文は無い。伝承はNo.19と同じ。
19	砺波市苗加浦之島	木	金屋石	明治	八月十五日	二七	一一	銘文は無い。伝承によると水木梅子さんの、姉妹が幼くして続いて亡くなられたので建立した。
42	砺波市小杉常徳寺東	木	木造	明治	八月十五日	六〇	三〇	銘文は無い。
41	砺波市小杉	木	木造	明治	八月十五日	一〇〇	三五	銘文は無い。伝承によると明治後期に砂田又平宅の戦没者慰霊のために建立された。子孫は東京に移住されたため、縁者の孝太郎氏が管理されている。
40	砺波市小杉	木	凝灰岩	大正	八月十五日	六四	三四	銘文は無い。伝承によると明治後期に、福田家の子供さんが川に流れて死亡したのでその供養の為に建立された。
39	砺波市紺屋島	金	木造	大正		三七	一五	銘文は裏面に「釈尼妙寂大浦そのい 大正十二年十二月二十三日入魂」とある。
38	砺波市紺屋島	木	木造	大正		三六	一四	銘文は裏面に「釈尼妙寂大浦そのい 大正十二年十二月二十三日入魂」とある。
37	砺波市狐島	木	越前石	大正	七月二十二日	四五	一四	銘文は無い。伝承によると森井寛五郎さん宅の森井しげさんが自分の母親を偲んで大正五年ごろに建立された。
36	砺波市狐島	木	金屋石	明治	七月二十二日	五八	二二	銘文は無い。元は青年団が管理していた。
35	砺波市狐島榎島	木	金屋石	明治	八月七日	四二	一七	銘文は無い。
34	砺波市西中	コ	凝灰岩	昭和		三五	一一	銘文は無い。伝承によると吉岡芳太郎さんの兄弟二十五歳と二十七歳が亡くなり、昭和十一年庄川町小牧で当時五円で購入し建立した。
33	砺波市西中	コ	越前石	明治		五五	一六	銘文は無い。伝承によると中田さんの先祖の中田和兵衛さんが日清戦争の時、地区を守るために建立された。
32	砺波市西中	コ	越前石	大正		三五	一四	銘文は無い。伝承によると中田平四郎さん宅の子供さんが亡くなられ、その供養のため建立された。
31	砺波市鷹栖十六区	木	越前石	大正	七月二十二日	四一	二三	銘文は無い。伝承によると元不動島火葬場に安置されていた。

43	砺波市小島	木	金屋石	大正	十月三日	四七	二三	銘文は無い。伝承によると大正二年二代目毛利亀蔵さんが太子像を建立することを決意し、蔵田清一郎氏が棟梁となり師弟戸田重三さん他三名が大正二年にお堂を建立し、開眼法要を行った。
44	砺波市小島	コ	金屋石	明治	五月五日	二五	一五	銘文は無い。伝承によると高原さんの先祖で後継ぎの息子を亡くした母親が所用で石動町を歩いていると、亡くなった息子が太子様と似ていたので求め建立した。
45	砺波市東中	木	凝灰岩	大正	八月十五日	五九	二〇	銘文は無い。伝承によると大正十五年四月に、初めての子供が三歳で亡くなり、供養の為に建立した。
46	砺波市新屋敷	木	凝灰岩	明治	七月二十二日	六〇	二三	銘文は無い。伝承によると明治二十八年に有志の浄財を集め太子堂を建立し、石川県や高岡市からも参拝者があった。元神社の南側にあった。
47	砺波市高波北高木	木	金屋石	明治	八月十五日	四六	一八	銘文は台座に「法名釈尼妙湖 明治三十九年九月二十五日 加門金蔵」とある。伝承によると子供さんが亡くなって建立した。
48	砺波市高波北高木	コ	金屋石	明治	八月十五日	三二	一〇	銘文は台座に「明治二十七年八月理一郎建之、昭和五十二年八月再建輝雄」台座に「兄弟一同咲子正之好子勇雄朋子」、伝承によると仁木さんで雇われていた子守が「手ぼんぼ」していて、玄関で滑り落として子供を亡くされ、その供養の為に建立された。
49	砺波市高波荒屋	コ	凝灰岩	大正	八月十五日	四五	一五	銘文は無い。
50	砺波市高波江波	木	凝灰岩	昭和	八月十五日	五一	一六	銘文は無い。伝承によると大正十五年四月七日、水落村のある家が火災に遭い、その時高波小学校高等科一年生の山崎友親君が消防ポンプの誘導の手伝いをしていたが事故の為に即死した。その友親君の為に父親が昭和二年八月十五日に建立した。
51	砺波市高波江波	コ	金屋石	明治	八月十五日	五〇	一五	銘文は別石に「法名釈速成太子尊像建立市山伝平明治三十二年八月二十八日」とある。
52	砺波市高波南高木	コ	越前石	明治	八月十八日	五〇	一七	銘文は無い。
53	砺波市三郎丸	木	越前石	大正	八月十八日	七五	二五	銘文は無い。
54	砺波市石丸	木	木造	明治	八月二十四日	三五	一三	銘文は無い。
55	砺波市木下神社前	木	木造	明治	八月二十四日	三五	一三	銘文は無い。
56	砺波市千保	コ	金屋石	明治	十一月一日	三八	一四	銘文は無い。氷見市よりお受けする。赤痢が大流行し大勢の子供達が死亡した。その供養の為に、子供達がお金を出し合って建立した。
57	砺波市大窪	木	金屋石	大正	十一月一日	三四	一二	銘文は台座に「大正五年六月九日」とある。伝承によるとこの太子像は元吉田庄吉さん宅の本家にあったが、ここに納められた。本家は代々「きこり」であった。
58	砺波市石丸	木	金屋石	明治	十一月一日	四七	一五	銘文は無い。東石丸南部の青壮年が管理している。伝承によると、明治時代にはこの地区は力持ちが多く盤持や草相撲ではどこにも負けることがなかったという。特に井波町瑞泉寺の太子伝の盤持大会や相撲大会には、絶対に優勝を他に譲らなかつた。これも太子様のおかげということで井波町から分身をいただいた。
59	砺波市柳瀬久遠寺	木	金屋石	明治	一月三日	四一	一六	銘文は無い。伝承によると、近江助左衛門さんの奥さんの夢枕に太子様が立たれ、太子様を立てて欲しいといわれたので、地区で建てた。
60	砺波市太田一区	木	金屋石	明治	六月一日	三五	一五	銘文は台座に「明治二十三年九月創立」「太田村第一番組」「総連中」とある。
61	砺波市太田三区	木	金屋石	明治	六月一日	五〇	一九	銘文は無い。
62	砺波市太田五区 専念寺	木	金屋石	明治	八月下旬	五〇	一九	台座裏に墨書「明治二十八年六月高岡通り町 大仏師北本吉蔵作」とある。庄川の川工事関係者の造立。

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63					
砺波市池原	砺波市上和田	砺波市福岡権照寺	砺波市東保石坂	砺波市頼成	砺波市安川山下	砺波市安川福山	砺波市安川茶ノ木	砺波市安川野武士	砺波市太田西区	砺波市太田久泉	砺波市太田祖泉					
木 金屋石	コ 金屋石	木 木造	木 金屋石	木 木造	木 金屋石	コ 木造	木 金屋石	木 金屋石	木 凝灰岩	コ 金屋石	木 金屋石					
明治	明治	明治	明治	明治	昭和	明治	明治	明治	大正	明治	明治					
二月	七月七日	三月		七月七日			八月二十四日		七月二十一日	十一月十九日	十月三日					
四三	四四	三〇	四二	五〇	三七	二八	四四	五一	五五	三五	三五					
一六	一六	二〇	一六	一六	一四	八	一六	一七	一九	一六	一一					
銘文は無い。伝承によるとこの太子様は、池原地区全体で建立した。	銘文は無い。伝承によると宮田義正さんの祖父が、金屋で求めたという。	銘文は無い。建築に関係する職人(建具・大工)などの人たちが世話をし、祭りをを行う。	銘文は台座に「明治十九年 太子講」とある。石坂は大工、木挽などの職人が多くいた。地区全体でお守りしている。	銘文は無い。伝承によると明治二十七年頃、頼成上村に神社が無かったので太子堂をつくった。	銘文は無い。伝承によると太子講の同行が辻家に寄進したものという。	銘文は台座の裏に「白雲刀」とある。	銘文は台座に「明治廿子十一月作」とある。修行僧が井波より来られ、茶ノ木で水を求められたが断られたので、「ここでは水が出なくなるだろう」といわれ、村人は急遽太子像を建立したという。堂は地元でも名が知れた安藤一郎氏によるものである。	銘文は台座に「明治二十六年四月太子建立」とある。文書に「明治二十九年太子報恩講雑用帳」がある。	銘文は無い。伝承によると明治二十五年頃天野新と大門の村境に大きな川が流れていて、その川底に太子像があり、境信雄さんの祖父が拾い上げ、ここにお奉りした。	銘文は無い。	銘文は無い。					
91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75
南砺市松島	砺波市庄川町三谷 稲荷神社前	砺波市庄川町三谷	砺波市庄川町下青島	砺波市庄川町田畑	砺波市庄川町小牧	砺波市庄川町横住	砺波市伏木谷	砺波市五谷	砺波市小中尾	砺波市中尾	砺波市井栗谷峰	砺波市東別所	砺波市市谷	砺波市坪野	砺波市正権寺	
石 金屋石	木 金屋石	木 越前石	石 金屋石	石 金屋石	石 金屋石	石 金屋石	コ 金屋石	木 金屋石	木 金屋石	木 木造	コ 金屋石	木 金屋石	木 金屋石	木 金屋石	木 金屋石	
大正	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	大正
			八月二十三日	八月十六日			九月一日	九月一日	九月二十二日			七月二十五日	八月二十四日	八月二十四日	八月二十四日	
一八	四七	四六	七〇	六二	三〇	二七	三七	三八	一八	二一	三四	五二	四八	四八	三〇	
五	一八	二〇	三〇	一七	一一	八	一一	一一	一〇	一〇	一一	二四	一六	一六	一一	
銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。浮き彫りである。	銘文は左側面に「明治四十三年二月田中理藏建之」とある。浮き彫りである。	銘文は堂に「明信院釋朋知□□□」とある。	銘文は無い。	銘文は堂内に「釈清良清一郎 明治十九年二月十七日」とある。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は台座に「明治三十八年二月井波町横山宇之昭 歳六十九才」とあり、倉田又四郎の夢枕に太子様が立たれ、ありがたく建立した。	銘文は無い。伝承によると池田孫八家孫次の寄進によるものである。	お堂は般若の熊木大工の作である。	銘文は無い。伝承によると市谷に太子様が欲しいという事で、寒念仏をしてその浄財で建立した。	銘文は無い。伝承によると昔坪野に石仏が一体も無かった。それを嘆き太子様を建立した。	銘文は無い。伝承によると大正四年三月に、松島貴志志子さんが亡くなりその供養の為に家族が建立した。	

109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	
南砺市上田	南砺市国広	南砺市金戸	南砺市前田	井口村久保	福野町安居安居寺	福野町野尻川原	南砺市八塚	南砺市上野	南砺市高堀	南砺市長源寺	南砺市高儀	南砺市本江墓地	南砺市谷浄教寺	南砺市松島	南砺市大宮司	南砺市軸屋	南砺市飛驒屋	
石	石	石	木	石	石	コ	コ	石	木	木	木	コ	コ	木	コ	コ	露	
金屋石	金屋石	金屋石	越前石	凝灰岩	砂岩	砂岩	金屋石	木造	金屋石	砂岩		金屋石	砂岩	安山岩	金屋石	金屋石	金屋石	
明治	明治	明治	昭和	明治	大正	昭和	昭和	明治	明治	明治	明治	明治	明治	大正	大正	明治	昭和	
															七月十五日		八月十六日	
三八	二六	二八	四八	六〇	四六	三九	三二	六〇	六九	三〇		五〇	三五	二九	五〇	六三	八四	
一一	一三	一〇	二〇	四三	二〇	一四	一三	一八	三六	一三		一九	一二	二三	一七	二四	四三	
銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。浮き彫りである。	銘文は「台座に「井波作人常川義太郎 大正八年四月二十一日釈安乗」とある。裏面に墨書で「大正八年四月廿一日 平作弟外次郎釋安乗行年十九才」。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。目にガラスが入る。	銘文は無い。	銘文は無い。浮き彫りである。	銘文は無い。大正十年ころ村の子供達の幸せを祈り故石岡太一氏が寄進した。常川金三郎の作である。	銘文は無い。目にガラスが入る。明治年間に長谷川しん右衛門が離村して大阪に行かれた時に記念に残されたもの。元は福野町軸屋にあった。	銘文は無い。裏面に「昭和五十七年六月移設再建 飛驒屋村」とある。浮き彫りである。	銘文は無い。
126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110		
南砺市上野公民館前	南砺市嫁兼公民館前	南砺市吉見バス停	南砺市吉見南谷局	南砺市五郎谷	南砺市五郎谷	南砺市久戸	南砺市香城寺墓地	南砺市香城寺墓地	南砺市広谷	南砺市館	南砺市館	南砺市小山若宮社	南砺市天神火葬場	南砺市栄町	南砺市岩木	南砺市旭町		
石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	木	石	石	木		
越前石	砂岩	越前石	砂岩	金屋石	金屋石	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	凝灰岩	砂岩	木造		
昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	明治	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	明治	明治	昭和	昭和	明治		
四〇	四三	四三	三〇	四〇	四二	三六	二九	四〇	二九	四五	四一	三二	三四	四七	一五	五七		
一一	一七	一五	一〇	一六	一八	一六	九	一五	九	一五	一八	一〇	一五	一七	五	八		
銘文は無い。伝承によると溺死した子供の供養のために建立。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。渡辺豊蔵さんが道路の安全守護のために建立。	銘文は無い。出村与蔵さんが昭和三年頃に建立。	銘文は無い。出村与蔵さんが刀利への道が出来たときに安全守護のために建立。	銘文は無い。	銘文は無い。浮き彫りである。	銘文は無い。	銘文は無い。松平仁右衛門さんが、亡くなった三人の子と姉妹の供養のために建立。	銘文は無い。伝承によると上口伊三郎さんの三男が昭和二十年に戦死したので建立。	銘文は無い。地蔵が破損したので代わりに井波町の石工に彫らせた。	銘文は無い。浮き彫りである。	銘文は無い。	銘文はお堂に「釈尼道堅」「昭和五年四月大家市三二」。	銘文は無い。伝承によると、子供の供養のため建立。	銘文は無い。		

145	南砺市下梨五箇山タクシ前	コ	凝灰岩	昭和	五七	二〇	銘文は無い。
144	南砺市見座	コ	凝灰岩	昭和	四一	一五	銘文は裏面に「昭和三十六年七月二十二日 法名釈尊照」。
143	南砺市米栖	石	砂岩	昭和	三〇	一一	銘文は無い。
142	南砺市祖山ダム入り口	コ	凝灰岩	昭和	三二	一二	銘文は無い。伝承によると、子供の事故死の為に建立。
141	南砺市祖山共同墓地	コ	凝灰岩	昭和	二一	八	銘文は無い。
140	南砺市寿川	石	砂岩	昭和	二六	八	銘文は無い。
139	南砺市夏焼	コ	凝灰岩	昭和	三〇	九	銘文は無い。伝承によると、落石事故死のため建立。
138	南砺市龍渡	石	凝灰岩	昭和	三二	一〇	銘文は無い。
137	南砺市大島	コ	砂岩	昭和	三八	一四	銘文は無い。伝承によると、野原亀蔵の父の供養の為に建立。
136	南砺市下梨郵便局北	石	凝灰岩	昭和	二八	二二	銘文は無い。伝承によると、子供の歿山事故死により建立。
135	南砺市高宮	木	砂岩	昭和	二四	八	銘文は無い。子供の死のために建立。
134	南砺市神成	木	越前石	昭和	四〇	一五	銘文は無い。子供の死のために建立。
133	南砺市鍛冶	コ	砂岩	明治	四六	一五	銘文は無い。子供の死のために建立。
132	南砺市山田	石	砂岩	昭和	二三	一〇	銘文は無い。山村清作氏の叔父が日露戦争で戦死されたので建立。
131	南砺市赤阪	木	凝灰岩	大正	四六	一八	銘文は無い。大正天皇の御大典記念に、地区の安泰と交通安全のために建立。
130	南砺市土生新	木	凝灰岩	昭和	四八	二〇	銘文は無い。昭和十九年戦死した金山善吉氏のために建立。
129	南砺市土生新南部 菅原前	石	越前石	昭和	五二	二三	銘文は無い。
128	福光町矢留	石	凝灰岩	大正	三〇	一三	銘文は無い。
127	南砺市土生新墓地	露	凝灰岩	大正	四〇	一五	銘文は無い。浮き彫りである。
165	小矢部市下中公民館東	コ	木造	昭和	六五	二三	銘文は無い。
164	小矢部市下中公民館東	コ	越前石	昭和	三八	一二	銘文は、台座に「深田勇作」とある。
163	小矢部市五社	コ	金屋石	明治	四六	一七	銘文は無い。
162	小矢部市水落	木	越前石	昭和	六二	一八	銘文は無い。
161	小矢部市芹川下区	コ	砂岩	昭和	二九	一一	銘文は無い。
160	小矢部市野端	木	砂岩	昭和	五二	二二	銘文は無い。
159	小矢部市論田	木	金屋石	昭和	一四	七	銘文は無い。
158	小矢部市安楽寺	木	越前石	昭和	四四	一五	銘文は無い。
157	小矢部市名畑	木	越前石	昭和	二七	一七	銘文は無い。
156	小矢部市小森谷	コ	越前石	昭和	四三	一六	銘文は無い。
155	小矢部市下後丞	コ	越前石	明治	四二	一五	銘文は無い。伝承によると日露戦争の戦死者を弔うために建立。
154	小矢部市内御堂	コ	越前石	昭和	四四	一二	銘文は無い。
153	南砺市利賀村上畠	屋内	金屋石	明治	二七	一二	銘文は無い。個人の家であり、小さいながら森川作であろう。
152	南砺市利賀村谷内	木	凝灰岩	大正	四八	二五	銘文は無い。子供が川で水死し、供養のために建立。
151	南砺市利賀村下村	コ	凝灰岩	大正	四三	二五	銘文は無い。浮き彫りである。
150	南砺市草嶺	コ	金屋石	昭和	四〇	一七	銘文は無い。大牧発電所の上にある。
149	南砺市仙野原	コ	金屋石	明治	四一	一五	銘文は無い。堂内に金剛界大日・地藏がある。
148	南砺市高沼	コ	金屋石	明治	三六	一六	銘文は無い。石灰山の守り本尊として信仰された。
147	南砺市脇谷	コ	金屋石	昭和	三六	二三	銘文は無い。脇谷の名水の場所に安置。
146	南砺市脇谷	コ	金屋石	昭和	四六	一七	銘文は無い。昭和十五年に雪崩の犠牲になった方の供養のために建立。脇谷の名水の場所に安置。

181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166
高岡市荒見崎	高岡市串岡尼寺	高岡市十日市三光寺	高岡市吉久西照寺	高岡市中保	高岡市東五位	小矢部市福岡	小矢部市小神	小矢部市小神	小矢部市西中	小矢部市金屋本江	小矢部市水牧	小矢部市水牧	小矢部市下中	小矢部市下中	小矢部市下中
コ	木	コ	コ	木	木	木	木	木	コ	木	木	石	石	コ	木
凝灰岩	凝灰岩	金屋石	花崗岩	金屋石	金屋石	砂岩	越前石	越前石	砂岩	金屋石	金屋石	越前石	越前石	砂岩	金屋石
明治	明治	明治	明治	大正	大正	昭和	昭和	昭和	大正	明治	明治	昭和	大正	昭和	昭和
六〇	四七	四三	三八	四一	四一	三〇	二三	二九	四三	六一	五四	四〇	五六	三〇	五八
一八	一七	一三	一六	一〇	一〇	一一	九	一〇	一五	一六	一〇	一一	二〇	一一	一二
銘文は無い。 「石工駒井喜平」世話人 布橋豊蔵 岡島米蔵 榎清蔵 笠嶋外次 灰塚栄蔵 稲塚与三 衛理三郎 中西吉太郎 宅□□□ 発起人中 月安才智 岡嶋勇次郎 衛喜八郎 小嵐辰二 月安良太郎 月安米作 月安重 □ 米田□七 稲積泰蔵。	銘文は無い。元伏木の工場にあった。	銘文は台座に「明治廿九年建之」 三十二年九月十九日 山川小右衛門」とある。	銘文は無い。昔この地で消石灰を焼いていた人達が建立。	銘文は無い。大正五年ごろ井波町から購入、太子講がある。	銘文は無い。伝承によると亡くなった子供の供養のために建立。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は、台座に「明治三十二年亥九月吉日 世話人下村若連中」とある。	銘文は無い。	銘文は無い。病死した子供のために建立。	銘文は無い。	銘文は無い。
196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	
高岡市戸出市野瀬 茅野西田宅前	高岡市戸出市野瀬 松島宅前	高岡市戸出北町 光林寺内	高岡市戸出伊勢嶺	高岡市戸出古中西 公民館	高岡市戸出狼	高岡市戸出町富久町	高岡市戸出御蔵町辻	高岡市笹川	高岡市本保	高岡市今市	高岡市小竹春日社	高岡市下山田	高岡市二塚	高岡市二塚	
コ	木	石	木	石	石	石	石	石	石	石	木	木	石	石	
金屋石	金屋石	金屋石	金屋石	金屋石	金屋石	越前石	砂岩	凝灰岩	凝灰岩	砂岩	凝灰岩	凝灰岩	凝灰岩	凝灰岩	
明治	明治	明治末	明治	明治	明治	明治末	大正	大正	明治 後期	明治 後期	大正	大正	明治	明治	
四七	五七	四〇	四〇	四四	四九	二六	三〇	三五	六〇	四五	四二	四〇	三七	五〇	
二三	一一	二〇	一六	一六	二四	一六	一五	一四	一六	一八	一八	一七	一七	一一	
銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。古人の家にあたったが、住職がもらいうけた。子供が亡くなりその供養に造立した。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。横にある川に流れてきたという。	お堂に「法名釋了玄 大正十四年六月廿六日死去 俗名三代目源与八七十九才ニテ往生ニ太子堂再建 源与八 昭和廿八年八月十三日出来」	台座に「村ノ村井次郎九郎 石田善七 黒田仁右衛門」とあり、横の釈迦如来には「明治三十五年三月」とあり同時期の造立であろう。	台座に「大正四年一月十五日 高橋鶴次郎」とある。	銘文は無い。伝承によると大正十三年に建立。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	

215	高岡市福岡町開懸	コ	越前石	昭和	四〇	二五	銘文は無い。
214	高岡市福岡町木舟	コ	越前石	昭和	二六	一〇	銘文は無い。
213	高岡市福岡町荒屋敷	コ	凝灰岩	昭和	三八	一七	銘文は無い。
212	高岡市福岡町小伊勢領	木	金屋石	明治	四九	一五	銘文は無い。目にガラスが入る。
211	高岡市福岡町寺谷内	木	木造	明治	五八	一九	銘文は無い。
210	高岡市福岡町三日市寺町	コ	金屋石	明治	五二	一九	銘文は無い。目にガラスが入る。
209	高岡市福岡町矢部	コ	花崗岩	昭和	四二	一五	銘文は無い。
208	高岡市醍醐横越善行寺	木	木造	明治	四七	二〇	銘文は無い。本堂に安置される。
207	高岡市醍醐夏住鴨島宅	コ	金屋石	明治	四九	一七	銘文は無い。
206	高岡市醍醐今庄今田宅	コ	金屋石	明治	四五	一七	銘文は無い。
205	高岡市醍醐油屋墓地	石	金屋石	明治	七〇	二八	銘文は無い。森川栄次郎作。この地区には職人が多い。お堂が立派である。
204	高岡市是戸延島延野宅	石	金屋石	明治	四〇	一五	お堂に「平成元年八月再建 北川すみ子 延野口子 きみ 光子 満知子 俊子」。
203	高岡市是戸竹日尾宅	コ	金屋石	明治	四七	一八	銘文は無い。
202	高岡市大清水	木	金屋石	明治	四〇	一二	銘文は無い。
201	高岡市春日	木	木造	明治	四六	一五	銘文は無い。尊像台座裏に「高岡市通り町大仏師北本吉蔵作」。
200	高岡市吉住	木	金屋石	明治	四五	二〇	銘文は無い。棟札表に「尊像堂 願主梅島豊次郎 明治二十七年八月建立」裏に「堂工匠 字祖泉村上田喜兵衛 上田喜左エ門」。
199	高岡市石代県道淵	コ	越前石	大正	四三	二五	銘文は無い。
198	高岡市西部金屋大坪宅	石	金屋石	明治	三五	二〇	銘文は無い。
197	高岡市西部金屋西保神社	木	金屋石	明治	五二	二四	銘文は無い。森川栄次郎の作。
229	富山市婦中町吉谷	木	金屋石	明治	三四	一五	銘文は無い。
228	富山市婦中町禊原	木	金屋石	明治	四八	二〇	銘文は台座に「寄進高井松之助」。
227	氷見市土倉養安寺	木	越前石	明治	六〇	二二	銘文は台座に「明治二十八年一月求乞」とある。
226	射水市梅ノ木	木	金屋石	昭和	二八	一〇	銘文は無い。
225	射水市串田新	木	凝灰岩	明治	二八	一〇	銘文は無い。
224	射水市布目沢	木	金屋石	明治	五五	二〇	銘文は無い。扁額があるが読めない。
223	射水市三戸田明德寺	木	木造	大正	四七	二〇	銘文は無い。堂の垂れ幕に「虎の年大正十五年三月三十日寄進高橋久右エ門」とある。
222	射水市鑑塚	木	砂岩	明治	五〇	一八	銘文は無い。
221	射水市生源寺公民館前	木	木造	明治	四八	一八	銘文は無い。
220	射水市若林	木	木造	明治	四八	一六	銘文は無い。目にガラスが入る。
219	射水市倉田淨円寺	木	木造	明治	三二	一二	銘文は無い。
218	射水市太閤山二丁目公民館前	木	金屋石	明治	四一	一七	銘文は無い。伝承によると明治二十八年太閤山の開拓者山内喜太郎・山内伊三・野尻作次郎・野尻竹次郎の四人で建立。山内・野尻は砺波の出身という。特に野尻は東野尻の出身という。山内は元は石坂という姓であったという。太閤山は始め山内と野尻の二軒が入ったという。近くに石坂山という地名があるが、これは元山内氏の持ちものだった。太閤山の元祖といわれている。野尻竹次郎は草相摸が好きであったという(野尻達夫氏六十五歳談・三代目・平成二十年六月四日調査)。
217	射水市新町心洗寺	木	石膏	昭和	二二	七	銘文は無い。伝承によると黒川さんの子供が亡くなったのでその供養のために建立。
216	高岡市福岡町大滝神社	木	木造	昭和	四二	一一	銘文は裏に「昭和六年十一月 作者高岡市仏師本保喜作」。

246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230
富山市伏木	富山市松野	富山市八尾町尾畑	富山市八尾町正間	富山市八尾町西葛坂	富山市八尾窪	富山市八尾町足谷	富山市八尾町茗が原	富山市山田沼又	富山市山田牧	富山市山田中村八幡社	富山市山田小谷	富山市山田数納	富山市山田居舟	富山市婦中町河原町	富山市婦中町外輪野	富山市婦中町 平等公民館東
木	木	石	石	石	石	木	石	木	木	木	木	コ	コ	木	木	木
凝灰岩	金屋石	凝灰岩	砂岩	凝灰岩	砂岩	砂岩	凝灰岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	金屋石	凝灰岩	金屋石	金屋石
明治	明治	昭和	昭和	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	江戸末	明治	大正	昭和	大正	明治
一四	三六	五〇	五〇	四五	四五	五〇	四〇	五〇	三六	六八	三二	三八	二七	六五	四〇	三四
五六	一五	二〇	二〇	一八	一五	二〇	一七	一八	一二	二五	一二	一七	一〇	一九	二三	一四
銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は台座に「昭和十年八月十一日 安置 宮本菊次郎」とある。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。「山田村史」によると、 庄川町から購入。	銘文は無い。「山田村史」によると、 井波から購入。	銘文は無い。「山田村史」によると、 井波から購入。	銘文は無い。「山田村史」によると、 安政四年の造立。庄川町金屋から 購入。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は無い。	銘文は台座に「大正五年度 同名 山崎滋次郎 山崎与次郎 寺家寅次 郎 坂口政治 藤記豊次郎 七人受 持」とある。	銘文は無い。

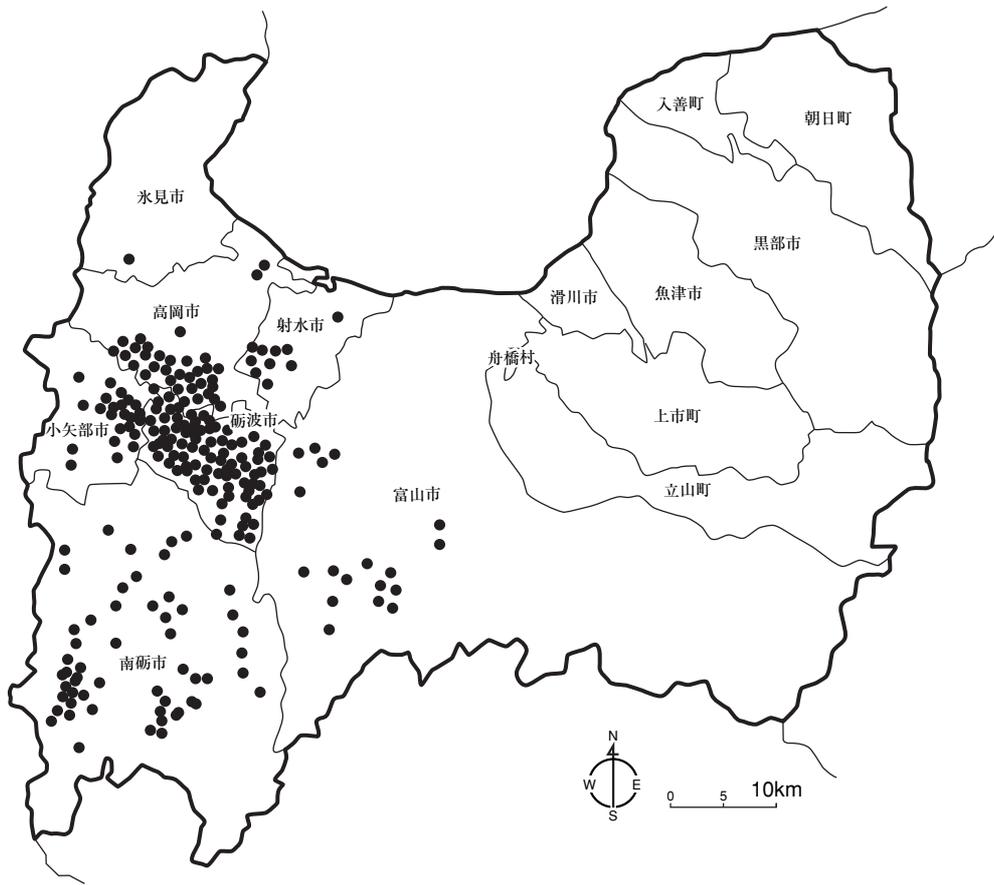
聖徳太子南無仏（石造）

砺波市太田（高さ五一cm・幅一八cm）

上半身雪のような白い肌に、緋の袴を召したお姿である。ここにある南無仏はおっぱいが、ややふくらんだ少女のようである。(O)



图3 29 聖徳太子南無仏分布图



謝辞

本展覧会を開催するにあたり、寺院をはじめ、貴重な法宝物をご貸与くださいました所蔵者の方々、ならびに展覧会実現のためにご協力いただきました関係諸機関および個人の方々に対し、心から御礼申し上げます。

東本願寺	飛鳥寛恵	範浄真了
井波別院瑞泉寺	飯田和夫	埴山法山
城端別院善徳寺	石黒有恒	坂東宏一
浄光寺	石野忠夫	藤田誓壽
景完教寺	稲沢淳勝	古井康典
善興寺	岩城阿喜子	松浦正昭
聞願寺	太田浩史	山脇 惇
常福寺	風間耕司	吉澤邦磨
大福寺	川田哲朗	(五十音順・敬称略)
妙蓮寺	清原勝利	
善法寺	斎藤嶺雄	
西蓮寺	佐藤博義正	
漆谷念仏道場	紫藤健一	
高岡教区第四組	瀬尾秋衛	
孤島地区会	高島静心	
高坪照吾会	高橋延定	
高道尼御講	高原忠正	
富山県教育委員会	竹部俊恵	
砺波市教育委員会	鶴松 瑩	
南砺市教育委員会	埜村豊寿	

砺波の真宗風土 図録

砺波郷土資料館、となみ散居村ミュージアム、砺波市美術館共同企画展

編集 砺波の真宗風土 ワーキング・グループ

尾田武雄（砺波市文化財審議委員）

小西竹文（砺波市美術館長）

安カ川恵子（砺波郷土資料館学芸員）

末永忠宏（砺波市美術館学芸員）

〒939-1383 富山県砺波市高道145-1

電話 〇七六三・三二・一〇〇一

制作 株式会社トーザワ

発行 砺波の真宗風土展実行委員会 ©二〇一〇

